釜淵C遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集

財団法人
山形県埋蔵文化財センター
6-2003-1461-01

2003
1461
6

2003

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

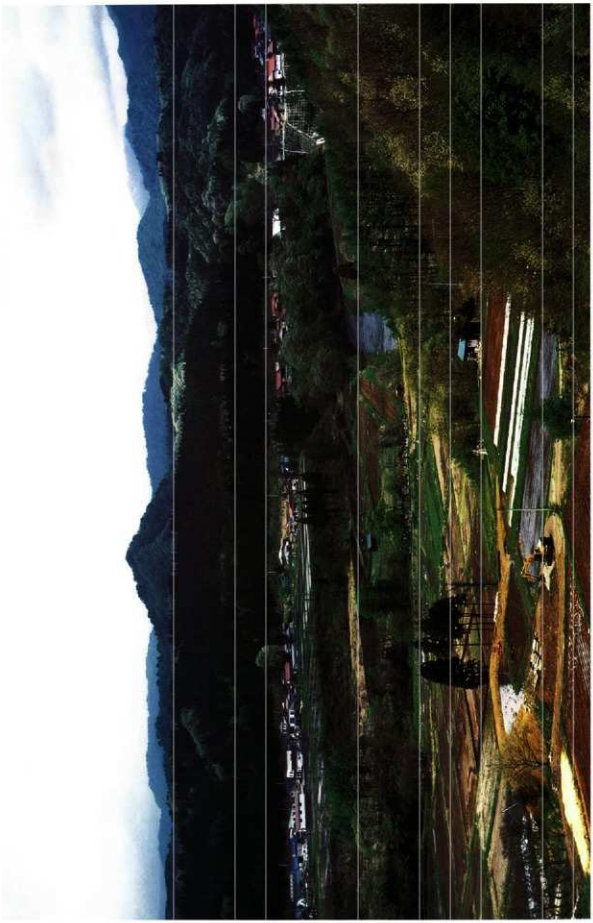
釜淵（かまぶち）C遺跡

発掘調査報告書

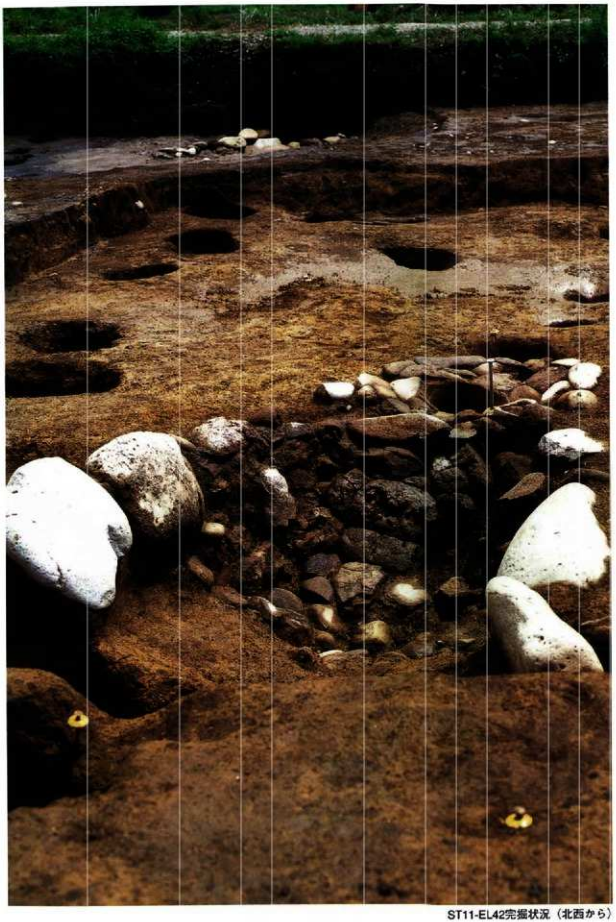
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第115集

平成15年

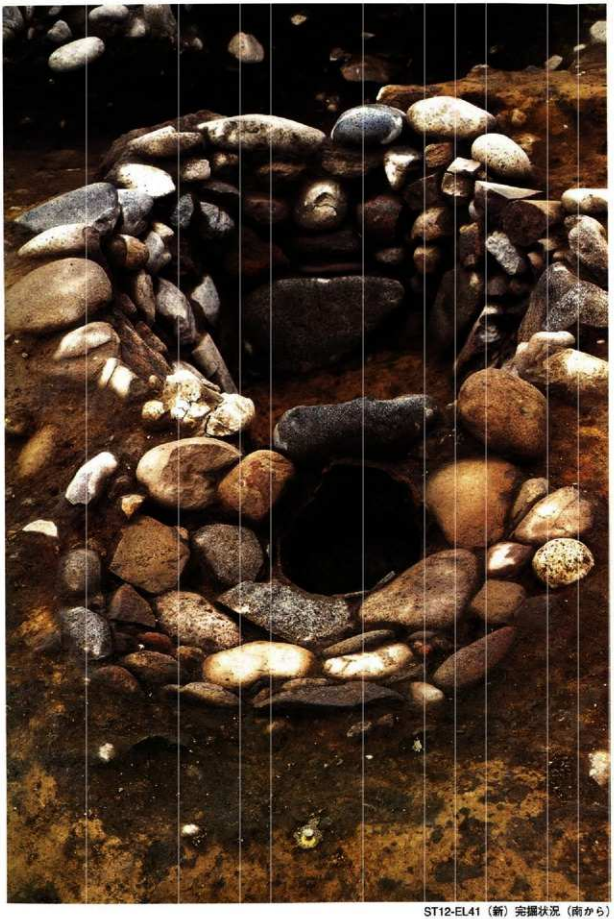
財団法人　山形県埋蔵文化財センター



潮岬灯台（南東から）



ST11-EL42完掘状況（北西から）



ST12-EL41（新）完掘状況（南から）

ST12発掘状況（南から）

SM233検出状況（北西から）

C区遺物包含層西壁断面（北西から）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、釜淵Ｃ遺跡の調査成果をまとめたものです。

釜淵Ｃ遺跡は、山形県の北部に位置し秋田県と隣接する、最上郡真室川町にあります。遺跡は神室山系に源を発する塩根川の河岸段丘上に立地し、付近には釜淵ＡからＦの５遺跡のほか、多くの縄文時代の遺跡が点在しています。なかでも釜淵Ｃ遺跡は、古くからその存在が知られており、大正年間に水田耕作中に見つかったといわれる土偶が、国の重要文化財に指定されています。

この度、県営ほ場整備事業担い手育成型（釜淵地区）に伴い、工事に先立って釜淵Ｃ遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では大きな成果を得ることができました。遺構は、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡群をはじめ、中期末葉から後期前葉の所産とみられる特異な形をした配石や列石遺構群、また、大量の遺物が出土した晩期の遺物包含層などが検出されました。出土した遺物は、縄文土器、石器などが整理箱にして900箱を超えています。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成15年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　木村　宰

例　言

1　本書は、県営ほ場整備事業担い手育成型（釜淵地区）にかかる「釜淵C遺跡」の発掘調査報告書である。

2　調査は山形県農林水産部の委託により財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺跡名	釜淵（かまぶち）C遺跡
遺跡番号	993
所在地	山形県最上郡真室川町大字釜淵字五郎前
調査主体	財団法人山形県埋蔵文化財センター 理事長　木村　宰
受託期間	平成13年4月1日～平成15年3月31日
現地調査	平成13年5月8日～8月6日
調査担当者	調査第一課長　野尻　侃 主任調査研究員　黒坂　雅人（調査主任） 調査研究員　豊野　潤子 調査員　大村　和弘

4　本書の作成は黒坂雅人、豊野潤子、大村和弘、執筆は黒坂雅人が担当した。

5　委託業務は下記のとおりである。

遺構写真実測	株式会社シン技術コンサル
遺物実測業務	株式会社シン技術コンサル

6　出土遺物、調査記録類については、報告書作成終了後すみやかに山形県教育委員会に移管する。

7　発掘調査および本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（順不同、敬称略）

山形県農林水産部、最上総合支庁産業経済部農村整備課、真室川町農林課、真室川町教育委員会、最上教育事務所、山形県教育委員会社会教育課文化財保護室、高橋龍三郎、長澤正機、佐藤禎宏

凡　例

1　本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

ＳＴ…竪穴住居跡　　ＥＰ…柱穴　　ＳＫ…土坑　　ＳＧ…河跡

ＳＭ…列石・配石遺構　　ＥＵ…埋設土器　　ＥＬ…炉

2　遺構番号は、現地調査段階での番号を、そのまま報告書での番号として踏襲した。

3　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（日本測地系）により、高さは海抜高で表す。

4　遺構実測図は１／40～１／100の縮図で採録し、各々スケールを付した。

5　土層観察においては、遺構を覆う基本層序をローマ数字で表し、遺構覆土については算用数字を付して区別した。

6　本文中の遺物番号は、遺物実測図・遺物写真図版に各々別番号を付し、遺物計測表中で対比させている。

7　遺物実測図・拓本図は１／２～１／３で採録し、各挿図にスケールを付した。

8　遺物写真図版は任意の縮尺で採録した。

9　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に拠った。

目　次

Ⅰ　調査に至る経過……1
Ⅱ　遺跡の立地と環境
　1　地理的環境……2
　2　歴史的環境……2
Ⅲ　調査の概要
　1　遺跡の概観……6
　2　調査の経過……8
Ⅳ　遺構と遺物
　1　検出遺構……9
　2　出土遺物……38
Ⅴ　調査のまとめ……180

報告書抄録……巻末

表

表1　遺跡地名表……5
表2　土層観察表……33
表3　縄文土器計測表（1）……168
表4　縄文土器計測表（2）……169
表5　縄文土器計測表（3）……170
表6　縄文土器計測表（4）……171
表7　土製品・石製品計測表（1）……172
表8　土製品・石製品計測表（2）……173
表9　石器計測表（1）……174
表10　石器計測表（2）……175
表11　石器計測表（3）……176
表12　石器計測表（4）……177
表13　石器計測表（5）……178
表14　石器計測表（6）……179

図　版

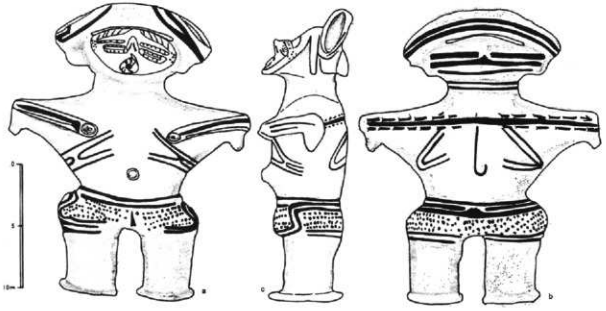
第1図　地形分類図……3
第2図　遺跡位地図……4
第3図　調査区概要図……7
第4図　ＳＴ２……12
第5図　ＳＴ４……13
第6図　ＳＴ10……14
第7図　ＳＴ11……15
第8図　ＳＴ12（1）……16
第9図　ＳＴ12（2）……17
第10図　ＳＴ13……18
第11図　ＳＴ16・ＳＴ32……19
第12図　Ａ区基本層序・ＳＭ234……25
第13図　ＳＭ233・306……26
第14図　配石・列石遺構群平面図……27
第15図　ＳＭ241・249・243・244他……28
第16図　ＳＭ280・281・282・279他……29
第17図　ＳＭ274・278・254・297他……30
第18図　ＥＵ228・90・230・ＳＫ99他……31
第19図　ＥＵ89・198・192・ＳＫ193他……32
第20図　Ｂ区基本層序……35
第21図　Ｃ区遺物包含層（1）……36
第22図　Ｃ区遺物包含層（2）……37
第23図　Ａ区縄文土器（1）……50
第24図　Ａ区縄文土器（2）……51
第25図　Ａ区縄文土器（3）……52
第26図　Ａ区縄文土器（4）……53
第27図　Ａ区縄文土器（5）……54
第28図　Ａ区縄文土器（6）……55
第29図　Ａ区縄文土器（7）……56
第30図　Ａ区縄文土器（8）……57
第31図　Ａ区縄文土器（9）……58
第32図　Ａ区縄文土器（10）……59
第33図　Ａ区縄文土器（11）……60
第34図　Ａ区縄文土器（12）……61
第35図　Ａ区縄文土器（13）……62
第36図　Ａ区縄文土器（14）……63
第37図　Ａ区縄文土器（15）……64
第38図　Ａ区縄文土器（16）……65
第39図　Ａ区縄文土器（17）……66
第40図　Ａ区縄文土器（18）……67
第41図　Ａ区縄文土器（19）……68
第42図　Ａ区縄文土器（20）……69
第43図　Ａ区縄文土器（21）……70
第44図　Ａ区縄文土器（22）……71
第45図　Ａ区縄文土器（23）……72
第46図　Ｂ区縄文土器（1）……73
第47図　Ｂ区縄文土器（2）……74
第48図　Ｂ区縄文土器（3）……75
第49図　Ｂ区縄文土器（4）……76
第50図　Ｂ区縄文土器（5）……77
第51図　Ｂ区縄文土器（6）……78
第52図　Ｃ区縄文土器（1）……79
第53図　Ｃ区縄文土器（2）……80
第54図　Ｃ区縄文土器（3）……81
第55図　Ｃ区縄文土器（4）……82
第56図　Ｃ区縄文土器（5）……83
第57図　Ｃ区縄文土器（6）……84
第58図　Ｃ区縄文土器（7）……85
第59図　Ｃ区縄文土器（8）……86
第60図　Ｃ区縄文土器（9）……87
第61図　Ｃ区縄文土器（10）……88
第62図　Ｃ区縄文土器（11）……89
第63図　Ｃ区縄文土器（12）……90
第64図　Ｃ区縄文土器（13）……91
第65図　Ｃ区縄文土器（14）……92
第66図　Ｃ区縄文土器（15）……93
第67図　Ｃ区縄文土器（16）……94
第68図　Ｃ区縄文土器（17）……95
第69図　Ｃ区縄文土器（18）……96
第70図　Ｃ区縄文土器（19）……97
第71図　Ｃ区縄文土器（20）……98
第72図　Ｃ区縄文土器（21）……99
第73図　Ｃ区縄文土器（22）……100
第74図　Ｃ区縄文土器（23）……101
第75図　Ｃ区縄文土器（24）……102
第76図　Ｃ区縄文土器（25）……103
第77図　Ｃ区縄文土器（26）……104
第78図　Ｃ区縄文土器（27）……105
第79図　Ｃ区縄文土器（28）……106
第80図　Ｃ区縄文土器（29）……107
第81図　Ｃ区縄文土器（30）……108
第82図　Ｃ区縄文土器（31）……109

第83図　C区縄文土器（32）…… 110
第84図　C区縄文土器（33）…… 111
第85図　C区縄文土器（34）…… 112
第86図　C区縄文土器（35）…… 113
第87図　C区縄文土器（36）…… 114
第88図　C区縄文土器（37）…… 115
第89図　C区縄文土器（38）…… 116
第90図　C区縄文土器（39）…… 117
第91図　C区縄文土器（40）…… 118
第92図　C区縄文土器（41）…… 119
第93図　C区縄文土器（42）・ミニチュア土器（1）…… 120
第94図　ミニチュア土器（2）…… 121
第95図　土偶（1）…… 122
第96図　土偶（2）…… 123
第97図　土製品（1）…… 124
第98図　土製品（2）…… 125
第99図　土製品（3）…… 126
第100図　土製品（4）……127
第101図　土製品（5）……128
第102図　石器（1）……129
第103図　石器（2）……130
第104図　石器（3）……131
第105図　石器（4）……132
第106図　石器（5）……133
第107図　石器（6）……134
第108図　石器（7）……135
第109図　石器（8）……136
第110図　石器（9）……137
第111図　石器（10）……138
第112図　石器（11）……139
第113図　石器（12）……140
第114図　石器（13）……141
第115図　石器（14）……142
第116図　石器（15）……143
第117図　石器（16）……144
第118図　石器（17）……145
第119図　石器（18）……146
第120図　石器（19）……147
第121図　石器（20）……148
第122図　石器（21）……149
第123図　石器（22）……150
第124図　石器（23）……151
第125図　石器（24）……152
第126図　石器（25）……153
第127図　石器（26）……154
第128図　石器（27）……155
第129図　石製品（1）……156
第130図　石製品（2）……157
第131図　石製品（3）……158
第132図　石製品（4）……159
第133図　石製品（5）……160
第134図　石製品（6）……161
第135図　石製品（7）……162
第136図　石製品（8）……163
第137図　石製品（9）……164
第138図　石製品（10）……165
第139図　石製品（11）……166
第140図　石製品（12）……167

写真図版

巻頭写真1　遺跡遠景
巻頭写真2　ST11EL42完掘状況
巻頭写真3　ST12EL41（新）完掘状況
巻頭写真4　ST12完掘状況
巻頭写真5　SM233検出状況
巻頭写真6　C区遺物包含層西壁断面
写真図版1　調査前状況
写真図版2　調査区近景
写真図版3　A区北半城遺構検出状況他
写真図版4　ST2完掘状況他
写真図版5　ST4完掘状況他
写真図版6　ST10検出状況他
写真図版7　ST10床面検出状況他
写真図版8　ST11床面検出状況他
写真図版9　ST13礫検出状況他
写真図版10　ST16床面検出状況他
写真図版11　ST12断面他
写真図版12　ST12床面検出状況他
写真図版13　ST12EL41（新）土器埋設部断面他
写真図版14　ST12EL41完掘状況他
写真図版15　ST13EL197完掘状況他
写真図版16　A区南半城竪穴住居跡群完掘状況
写真図版17　A区57～59-133～135礫検出状況他
写真図版18　A区配石・列石遺構群検出状況
写真図版19　A区配石・列石遺構群検出状況
写真図版20　A区配石・列石遺構群検出状況
写真図版21　A区配石・列石遺構群検出状況
写真図版22　SM243・SM244検出状況他
写真図版23　SM241・SM249検出状況他
写真図版24　SM248検出状況他
写真図版25　SM254検出状況他
写真図版26　SM257・SM259検出状況他
写真図版27　SM277検出状況他
写真図版28　SM306検出状況他
写真図版29　SM234検出状況他
写真図版30　EU89検出状況他
写真図版31　SK94土器出土状況他
写真図版32　SK44土器出土状況他
写真図版33　EU90検出状況他
写真図版34　EU116・117検出状況他
写真図版35　EU195検出状況他
写真図版36　EU43検出状況他
写真図版37　EU195・194検出状況他
写真図版38　B区調査前状況他
写真図版39　B区Ⅲ層71-43一括土器出土状況他
写真図版40　B区Ⅴ層土偶出土状況他
写真図版41　C区遺物包含層検出状況
写真図版42　C区遺物包含層検出状況
写真図版43　C区30～35-75～85調査状況
写真図版44　C区遺物包含層断面
写真図版45　C区遺物包含層断面他
写真図版46　C区遺物包含層完掘状況
写真図版47　C区遺75～105-90～95調査状況他
写真図版48　A区縄文土器（1）
写真図版49　A区縄文土器（2）
写真図版50　A区縄文土器（3）
写真図版51　A区縄文土器（4）
写真図版52　A区縄文土器（5）
写真図版53　A区縄文土器（6）
写真図版54　A区縄文土器（7）
写真図版55　A区縄文土器（8）
写真図版56　A区縄文土器（9）
写真図版57　A区縄文土器（10）
写真図版58　B区縄文土器（1）
写真図版59　B区縄文土器（2）
写真図版60　B区縄文土器（3）
写真図版61　B区縄文土器（4）
写真図版62　B区縄文土器（5）
写真図版63　B区縄文土器（6）
写真図版64　C区縄文土器（1）
写真図版65　C区縄文土器（2）
写真図版66　C区縄文土器（3）
写真図版67　C区縄文土器（4）
写真図版68　C区縄文土器（5）
写真図版69　C区縄文土器（6）
写真図版70　C区縄文土器（7）
写真図版71　C区縄文土器（8）
写真図版72　C区縄文土器（9）
写真図版73　C区縄文土器（10）
写真図版74　C区縄文土器（11）
写真図版75　C区縄文土器（12）
写真図版76　C区縄文土器（13）

写真図版77	A区土製品	写真図版93	C区磨製石斧（2）
写真図版78	B区土製品	写真図版94	A区円盤状礫石器他
写真図版79	C区土製品	写真図版95	C区円盤状礫石器
写真図版80	B区土偶他	写真図版96	A区石錘
写真図版81	B区・C区土版	写真図版97	B区・C区石錘他
写真図版82	A区石鏃他	写真図版98	A区凹石・磨石他
写真図版83	C区石鏃他	写真図版99	C区凹石・磨石
写真図版84	B区石鏃他	写真図版100	石皿
写真図版85	A区石匙他	写真図版101	A区石製品（1）
写真図版86	C区石匙	写真図版102	A区石製品（2）
写真図版87	A区石錐他	写真図版103	A区石製品（3）
写真図版88	C区石錐他	写真図版104	B区石製品（1）
写真図版89	B区打製石斧他	写真図版105	B区石製品（2）他
写真図版90	A区磨製石斧	写真図版106	C区石製品（2）
写真図版91	B区磨製石斧	写真図版107	C区石製品（3）
写真図版92	C区磨製石斧（1）	写真図版108	C区石製品（4）



※山形県総合学術調査会（1978）「神室山・加無山」PP. 330・331より転載

釜淵C遺跡出土土偶（国指定重要文化財）

Ⅰ　調査に至る経過

今回の釜淵C遺跡の発掘調査は、山形県農林水産部が計画した「県営ほ場整備事業担い手育成型（釜淵地区）」の工事に先立って実施された緊急発掘調査である。

遺跡付近の水田や畑は、古くから土器、石器が出土することで地元の人々から知られており、本遺跡から出土した土偶（前頁図）は昭和40（1965）年５月29日付で国の重要文化財に指定されている。この土偶は、「真室川町史」（真室川町1969）によると、大正４（1915）年春、斎藤九郎左衛門氏が五郎前280番地の田んぼを耕作中に、地下60cmほどのところから出土したとされ、現在は同町新町の正源寺に所蔵されている。「神室山・加無山」（山形県総合学術調査会1978）では、この土偶が出土した遺跡を釜淵D遺跡（県遺跡番号994）としているが、C、D遺跡付近の遺跡名を県遺跡地図登載以前には「五郎前遺跡」と称したところからの錯綜があるとみられる。その後の文献では土偶の出土地点は釜淵C遺跡内として扱われている。

国指定重要文化財の土偶

本遺跡に対する初回の発掘調査は昭和60（1985）年に真室川町教育委員会により実施された（長沢1986）。この調査は、今後に予想される暗渠工事、農道整備など、本遺跡に対する開発行為に備えての予備的な確認調査を目的として、同年４月20日から29日までの10日間の日程で行われた。土偶の出土地点と推定される部分に２m×26 m、以前から多量の遺物が包含されることが知られている段丘崖の北端部分に２m×８ mのトレンチを主体に約92㎡が調査され、一部ではあるが、前者では縄文時代後期末葉から晩期にかけての遺構、遺物の遺存および開田にともなう破壊の状況、後者では同じく後期末葉から晩期の良好な遺物包含層の存在が確認された。

昭和60年実施の確認調査

山形県教育委員会では、平成12年度、県営ほ場整備事業担い手育成型（釜淵地区）の施工に先立って、遺跡のより具体的な内容を把握するために10月23日から同月27日の日程で試掘調査を実施した（山形県教育委員会2002）。調査では事業にかかる遺跡範囲内約60,000㎡に38箇所、合計515㎡のトレンチを設定し重機および人力による掘り下げを行い、このうち25箇所で遺構、遺物を検出した。

この結果を踏まえ、ほ場整備事業の工法についての見直しがなされ、遺跡範囲の大方の部分については盛り土や畑地対応による遺跡の現状保存が可能となったが、表土が薄く竪穴住居跡などの密集が予想される墓地北側の水田、切り土工法をとらざるを得ない墓地東の水田中央部、先に真室川町教育委員会の調査で確認された遺物包含層の大半を含んで計画された水路部分の３箇所については、記録保存を目的とした発掘調査を行うことになった。

以上のような経過をもって、財団法人山形県埋蔵文化財センターでは、山形県農林水産部からの委託を受け、平成13年５月８日から８月３日の期間で上記３箇所6,300㎡について緊急発掘調査を実施するに至った。なお、現地調査終了後の遺構、遺物の整理作業および報告書作成作業は、平成14年度も継続して実施されている。

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

最上郡真室川町は、山形県の北端、秋田県と境を接し、町域の80%を山林が占める山間地帯に位置する（第１図）。秋田県との県境付近には神室山、加無山、甑岳、丁岳などの高峰が連なり、西の鳥海山へとつらなっている。町域を流れる河川はこれらの山々に源を発し、複雑に河岸段丘、小扇状地などを形成しながら、町の東部を流れる真室川と西部を流れる大沢川に集まり、町の南端部で合流し鮭川となり、やがて最上川に合流する。各河川の流路の狭さから、過去に幾度となく大水害を経験した地域である。

内陸性の気候
豪雪地帯

最上郡は概ね内陸性の気候である。寒冷多湿で、とりわけ冬季の降雪量は全国的にも多く、年間の根雪期間は100日を越える。また、日照時間も県内の他地域に比べて短く、くだもの王国として知られる山形県においては、例外的に果樹栽培が困難な地域である。農業は水稲、畑作を主体とするが、近年は、この厳しい自然環境と豊かな山林の資源を利用して、きのこなどの山菜の生産加工、良質の木材加工、ニジマス、アユなどの養殖が盛んに行われている。

塩根川の河岸段
丘上に立地

釜淵Ｃ遺跡はＪＲ釜淵駅の南約800m、真室川の上流である塩根川の左岸の河岸段丘上に立地している。河床面からの比高14m、標高は125m前後を測る。地目はほとんどが水田である。東の山麓から川に向かって緩やかに傾斜する段丘面には若干の起伏があり、Ａ区とＢ・Ｃ区の間には旧河道とみられる低地が存在する。また、遺跡付近では大字名のもとになった「釜淵」が、今回のＡ調査区の直下14mの崖下に碧の水を湛えている。

2　歴史的環境

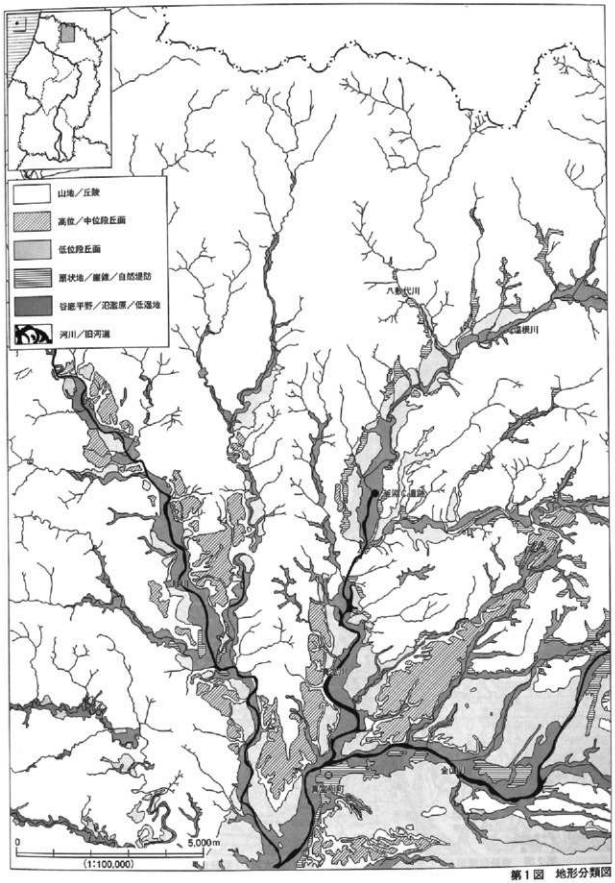
真室川町内では、現在約70の遺跡が確認されている。このうち縄文時代の遺跡は50以上を数え、その多くが川沿いの河岸段丘上に立地している（第２図）。

塩根川の上、中流域では釜淵集落の北約2.5kmの八敷台地区に８箇所の遺跡が集中する。いずれも旧石器時代から縄文時代の遺跡であり、このうち中台４遺跡、中台５遺跡は、平成12年に県営ほ場整備事業に先立って緊急発掘調査が実施された。中台５遺跡は開田による破壊を大きく受けていたが、中台４遺跡では、複式炉を伴う竪穴住居跡６棟や河川跡などの遺構と、約70箱の縄文時代中期末葉から後期初頭を主体とする土器、石器類が出土し、最北地区の該期集落の構造の一端が明らかにされた（黒坂・豊野2001）。

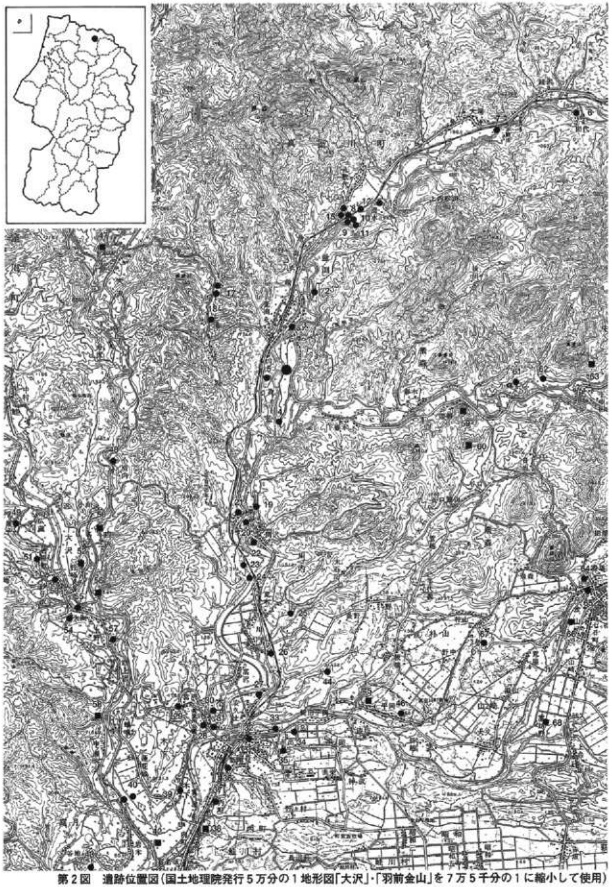
中台４遺跡

釜淵集落の周辺では釜淵Ａ遺跡からＥ遺跡（県遺跡番号991～995）の５箇所のほか、「釜淵林業試験場裏遺跡」（山形県総合学術調査会1978）を含む６遺跡が確認されている。すべて縄文時代の遺跡であり、各遺跡の詳細については不明な点が多いものの、Ａ～Ｄの各遺跡からは中期の遺物が、また、Ｃ～Ｅの各遺跡では晩期の遺物が出土している。このように、比較的限られた範囲において多くの縄文時代遺跡が集中することは、この地が当時の人々にとって快適な生活環境下にあったことを意味するものと考えられる。

釜淵遺跡群



第１図　地形分類図



第２図　遺跡位置図（国土地理院発行５万分の１地形図「大沢」・「羽前金山」を７万５千分の１に縮小して使用）

表１　遺跡地名表

番号	遺跡名	時代	種別	番号	遺跡名	時代	種別
1	釜淵Ｃ	縄文	集落跡	35	糸出	縄文	集落跡
2	釜淵Ａ	縄文	集落跡	36	小林	縄文	集落跡
3	釜淵Ｂ	縄文	集落跡	37	正源寺境内	縄文	集落跡
4	釜淵Ｄ	縄文	集落跡	38	鮭延城	中世	城館跡
5	釜淵Ｅ	縄文	集落跡	39	木の下	縄文	集落跡
6	田代	縄文	集落跡	40	蓮花城	縄文	散布地
7	大滝上野	縄文	散布地	41	鷺の瀬	縄文	散布地
8	中台１	縄文	散布地	42	オクビ楯	中世	館跡
9	中台２	縄文	集落跡	43	岩下後野	縄文	集落跡
10	中台３	縄文	包蔵地	44	長野	縄文	集落跡
11	中台４	縄文	集落跡	45	平岡楯	中世	館跡
12	中台５	縄文	集落跡	46	平岡	縄文	集落跡
13	中台６	縄文	集落跡	47	小又楯	中世	館跡
14	丸森１	旧石器	散布地	48	小川内	縄文	集落跡
15	丸森２	旧石器・縄文	散布地	49	巣子	縄文	集落跡
16	三滝	縄文	集落跡	50	内の沢楯	中世	館跡
17	三滝２	縄文	集落跡	51	古屋敷	縄文	集落跡
18	三滝３	縄文	集落跡	52	宮田沢山上楯	中世	館跡
19	壹野	縄文	集落跡	53	砂子沢	縄文	集落跡
20	栗谷沢Ａ	縄文	集落跡	54	大向Ａ	縄文	集落跡
21	栗谷沢Ｂ	縄文	集落跡	55	大向Ｂ	縄文	集落跡
22	関沢	縄文	集落跡	56	野崎楯	中世	館跡
23	畑野Ａ	縄文	集落跡	57	上野	縄文	集落跡
24	畑野Ｂ	縄文	集落跡	58	中の瀬楯	中世	館跡
25	柏木野	縄文	集落跡	59	吉次館	中世	館跡
26	川の内	縄文	集落跡	60	黒岩館	中世	館跡
27	悪戸	縄文	集落跡	61	小鼎	縄文	集落跡
28	秋山Ａ	縄文	集落跡	62	板ヶ沢口	縄文	集落跡
29	秋山Ｂ	旧石器・縄文	散布地	63	高倉館	中世	館跡
30	秋山Ｃ	縄文	集落跡	64	羽陽	縄文	集落跡
31	宮沢	縄文	集落跡	65	三代淵	縄文	集落跡
32	山神神社	縄文	集落跡	66	本町	縄文	集落跡
33	糸出稲荷神社	縄文	集落跡	67	朴山	縄文	集落跡
34	新田平岡	縄文	集落跡	68	鷲坊野	縄文	集落跡

Ⅲ　調査の概要

1　遺跡の概観

釜淵Ｃ遺跡の範囲については、原地形が開田によってかなり変化していることから、確定が困難であったが、平成12年に実施された山形県教育委員会による分布調査の結果等から、概ね墓地を西辺の中央として東西100～200m、南北500mの楕円状となり、面積約60,000㎡とかなり大規模な集落跡であることが想定された。遺跡はすべて同一の段丘面上に立地するが、北半部分では河床面からの比高約14mの切り立った段丘崖となり、南半部では約７m低位にもう１段の段丘の張り出しがある。また、遺跡の中央部分に幅約35m、比高差約1.5mの低位面が東西方向に観察された。今回は、上記遺跡範囲のうちでほ場整備によって削平をうける部分6,300㎡について発掘調査を実施した（第３図）。各調査区の概要は以下のようになる。

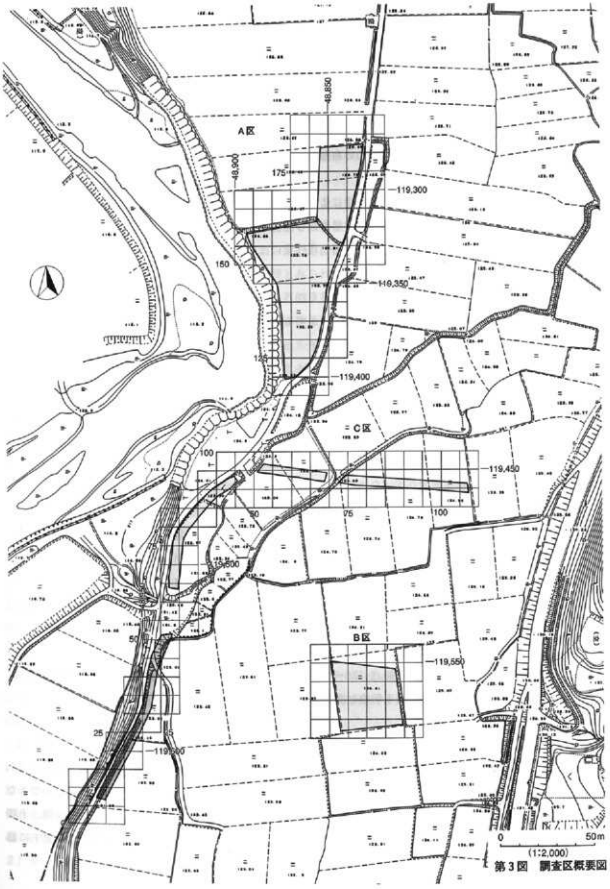
Ａ区　遺跡範囲全体では西辺中央にあたり、墓地の北に隣接する区域で、調査面積は3,550㎡である。西縁辺部分は塩根川の蛇行により削り取られた崖となる。調査区の基本層序は第12図に示した。堆積土は南に向かって薄くなり、Ｙ軸132以南では遺構確認面までの深さが15～20cmとなる。地山の状況は南半部では礫の混入の少ない暗黄褐色の砂層であるが、北に向かって礫の混入が多くなる。また、北東部分では粘土質となり、グライ化が認められる。北端の張り出し部分は現状で約70cm高く、黄褐色シルトの安定した地山となる。Ａ区付近は1970年頃の耕地整理で削平を受けたといわれるが、比較的遺存状態がよく、遺構と遺物の分布状況は、南半部分の竪穴住居跡群、中央部の旧河川または湿地とみられる落ち込み（ＳＧ９）、北西部の埋設土器をともなう配石、列石遺構群に大別される。竪穴住居跡は、Ｙ軸132以南において重複、建替え等を含めて11棟が検出された。住居の構造および出土遺物から縄文時代中期末葉を主体とするものとみられる。ＳＧ９は調査区中央部を東西に横切る落ち込みである。幅は最大で30mを越える時期があったとみられる。堆積土中には多量の遺物を包含する。縄文時代中期末葉から後期前葉を主体とするが、晩期の土器片も若干出土している。北西部の配石、列石遺構群は、埋設土器から中期末葉から後期前葉の所産と考えられる。なおＳＧ９については、水路となる西辺部を除き畑地対応による現状保存が図られた。出土遺物は約250箱である。

縄文時代中期末葉から後期前葉の集落跡

Ｂ区　遺跡範囲南半のほぼ中央部分にあたる。調査面積は1,600㎡である。基本層序は第20図に示した。地山は西に向かって傾斜し、西半部では黒色土が厚く安定して堆積し、良好な遺物包含層を形成している。遺物は、Ⅰ、Ⅱ層中には比較的少なくⅢ～Ⅴ層を中心に包含される。出土遺物は縄文時代晩期の土器、石器類等約100箱である。遺構は検出されなかった。

Ｃ区　遺跡範囲南西縁辺部から中央を東西に横切る水路部分である。1,150㎡をトレンチ調査した。遺物は約570箱を数えるが、そのほとんどが調査区南半の南北トレンチ出土である。この区域の北半部分には、約２mの厚さで縄文時代後期末葉から晩期にかけての遺物包含層が検出された。また、南半部の旧河川とみられる落ち込からは、中期末葉を主体とする遺物が出土している。北半部および東西のトレンチでは遺構、遺物ともに希薄であった。

縄文時代後期末葉から晩期の遺物包含層



第３図　調査区概要図

2　調査の経過

今回の調査は、現地調査を平成13年５月８日から同年８月６日の実働66日間にわたって実施した。以下にその概要を述べる。

５月８日

器材の搬入、５月９日鍬入れ式を行う。

５月９日～11日

各調査区の範囲決定のための布掘り作業を人力で行う。

５月14日～５月24日

Ｂ区、Ａ区、Ｃ区の順に重機による表土剥ぎ取り作業を実施する。表土から人力による掘り下げを予定したＣ区の遺物包含層を除き24日までに終了する。なお、各調査区で重機による表土剥ぎ取りが終了した部分から面整理作業にはいる。

５月25日～６月13日

Ｃ区遺物包含層南の表土除去作業を29日まで実施する。29日からＢ区の遺物包含層の掘り下げ作業を実施し、13日までにほぼ終了する。12日からＣ区北側の東西トレンチについて精査にはいる。

６月14日～７月６日

14日までにＣ区東西トレンチならびに南北トレンチ北半部の精査を終了し、Ｃ区遺物包含層の精査にかかる。途中梅雨期の悪天候が続くがほぼ予定通りに作業を行う。この間Ｂ区の土層断面図、写真撮影等の記録作業を実施し、６月28日までにＢ区および遺物包含層を除くＣ区の事業者側への引渡し準備を終了する。また、遺物包含層については６日までに土層観察用ベルト等一部を除き掘り下げを終了した。7月5日よりＡ区の遺構精査にはいる。

７月８日

真室川町主催の「ファミリーウォーキング」の一環で体験発掘調査に協力。小学生を含む一般町民45名の参加があった。

７月９日～７月16日

Ａ区の竪穴住居跡群を中心にした遺構精査と併行して、Ｃ区遺物包含層ベルトの撤去および底面の水場状遺構の精査を行う。

７月17日～７月30日

Ａ区の遺構精査を継続。24日から竪穴住居跡の精査に加えて配石遺構群の精査が本格化する。7月19日に地元の釜淵小学校の高学年児童による発掘体験学習を行った。

７月31日

調査説明会を開催する。平日の雨天にもかかわらず約150名の参加者があった。

８月１日～８月６日

終了間際の豪雨による期間延長

１日にＡ区全域が前日からの豪雨のため水没、業務委託による遺構の空中写真測量ができなくなり、その復旧もかねて、３日に予定していた調査終了が６日に延期となる。その間、土曜日ではあるが４日も稼動し、精査、記録作業の残り、器材片付け等を実施した。６日正午に器材を撤収。遺物の総出土箱数は918箱であった。

Ⅳ　遺構と遺物

1　検出遺構

A　竪穴住居跡

ＳＴ２（第４図　写真図版４）

小型の竪穴住居

Ａ区59～61－122～123区で検出された。検出面は小礫を少し含んだ暗褐色砂質シルトで、規模および平面形は直径3.6ｍの円形、検出面から床面までの掘り込みは６～15㎝である。床面は黄褐色を基調とする砂質シルトの貼床で硬くしまっている。壁面は北西部の立ち上がりがやや不明瞭である。これは住居廃棄後の植物模痕の影響とみられる。

住居内の床面からは９基の柱穴が検出されたが、このうちＥＰ25・26・29が主柱穴と考えられ、床面からの深さはそれぞれ35㎝・43㎝・50㎝、直径はいずれも25㎝ほどを測る。

炉（ＥＬ22）は住居の中央に構築された、長軸１ｍ・短軸60㎝の複式炉である。北側に石組部、南側に土器埋設部が位置する。石組には拳大の丸みを持つ石が使われており、半円形に埋め込まれている。石組部は検出面から最下部までは15㎝あり、激しく被熱し赤褐色化している。土器埋設部についても同様で、特に埋設土器の外縁部と内部の上半分が、著しく被熱かつ赤褐色化している。炉を挟んで対称位置の東西両側には幅５～８㎝、長さ70㎝余、深さ４～５㎝の溝状の掘り込み（ＥＤ304・305）が確認されている。炉に付随する施設の遺構と推測される。また炉の南北両側には、20㎝余の楕円形の石が埋め込まれている。ＥＬ22の埋設土器（第23図１）から、本竪穴住居跡の所属時期は縄文時代中期後葉と考えられる。

ＳＴ４（第５図　写真図版５）

ＳＴ２と同規模

Ａ区62～64－125～127区で検出された。検出面は大半が小礫を含んだ暗褐色砂質シルトであるが、住居の南東部分には３～10㎝大の礫が混入している。住居の規模は炉（ＥＬ33）の軸線を基準にすると、南東－北西が3.35ｍ、北東－南西が3.50ｍを測る。植物模痕により壁の所々が壊れ、検出時の平面形は不整形であったが、元来はほぼ円形であったと推測される。検出面から床面までの掘り込みは６～18㎝で、ＳＴ２と同様黄褐色砂質シルトの貼床になっている。

住居内からは柱穴６基と溝跡の一部分を検出した。主柱穴と見られるのはＥＰ34・35・36・37で、床面からの深さはそれぞれ25㎝・67㎝・58㎝・62㎝、直径はいずれも32㎝を測る。柱穴の底面は、突き固められたように硬くしまっている。

炉（ＥＬ33）は長軸74㎝・短軸58㎝の複式炉である。主柱穴の４基も、炉の埋設土器を中心にしてほぼ等間隔で配置されている。炉の石組部を構成する石には、長楕円形の偏平なものを用いている。被熱による変色、変形も見られる。土器埋設部については、土器の周りに小さめの石を配していたようだが、消耗が激しい状態である。炉全体の覆土は炭化物を多量に含んでおり、特に埋設土器の底面には粘性のある黒色土が堆積している。ＥＬ33の埋設土器（第26図２）や、住居の構造から、本竪穴住居跡の所属時期はＳＴ２とほぼ同時期と考えられる。

ＳＴ10（第６図　写真図版６・７）

Ａ区58～59－126～131区で検出された。検出面は暗褐色砂質シルトである。検出時のプランからは判然としなかったが、断面観察により３棟の重複関係が認められた。覆土中には大量の礫が混入しており、住居廃棄後にある程度の時間を経て一時に堆積したと見られる。構築順の新しい住居からＳＴ10（１）、ＳＴ10（２）、ＳＴ10（３）と登録した。住居の規模は、ＳＴ10（１）が直径5.5m、耕作土直下から床面までの掘り込み55cmを測る。ＳＴ10（２）は平面での確認が難しく、断面確認により、掘り込み50cmを測る。ＳＴ10（３）は直径4.8m、掘り込み70cmを測る。３軒とも平面形が円形の住居であることが推測される。壁面はＳＴ10（３）の南壁のみ急な立ち上がりを見せるが、それ以外の壁は、住居覆土と礫を含んだ地山との境にあたり、傾斜をもつ立ち上がりである。ＳＴ10（１）の床面は平坦で、明黄褐色微砂質シルトに黒褐色砂質シルトを含む貼床を形成する。ＳＴ10（２）からは貼床は検出されていない。ＳＴ10（３）の床面もＳＴ10（１）と類似する。

３棟の重複

検出された柱穴は３基で、いずれもＳＴ10(３)に属すると見られる。床面からの深さは50cm前後で、ＥＰ205は調査区外にかかっている。

ＳＴ10（１）の炉（ＥＬ202）は全体が石組で、中ほどに石を並べ区切りを設けている。南側と北側双方の石組の遺存状態から、前者が燃焼部、後者が前庭部の役割で使用されていたと考えられる。炉の底面にも先述の貼床が施されている。付随する埋設土器は見つかっていない。

ＳＴ10（３）の炉（ＥＬ204）については検出できた部分が石組部のごくわずかで、その大部分は調査区外に延びている。

堆積土内の出土遺物から本竪穴住居跡の所属時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＴ11（第７図　写真図版８）

Ａ区62～64－127～131区で検出された。検出面は暗褐色および灰褐色砂質シルトで、平面形は楕円形である。住居の北側については、風倒木痕の影響で明確な床面と壁面が検出できなかった。だがそれ以外のところでは、黄橙色シルトを基調に灰褐色シルトが少量混じる、非常に硬くしまった貼床になっている。逆に壁面は不安定で、立ち上がりが不明瞭な部分が見られる。住居の規模は長軸5.4m、短軸は推定で4.5m、床面までの深さは30cm前後を測る。

複式炉（ＥＬ42）は住居の北西寄りに築かれている。軸線は南東－北西で2.2m、幅は土器埋設部が74cm、燃焼部が１m、前庭部が1.1mを測る。床面からの深さは燃焼部が40cm、前庭部が30cmである。ＥＬ42の埋設土器（第29図１・２）および堆積土内の出土遺物から、本竪穴住居跡の所属時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

ＳＴ12（第８・９図　写真図版11～14）

Ａ区60～62－126～129区で検出された。検出面は暗褐色および灰褐色砂質シルトである。東西方向に長軸をもつ長軸６m、短軸推定4.5mのものと、円形に近い長軸５m、短軸4.5mの２棟の竪穴住居跡の重複とみられたが、堆積土の平面上での観察および土層断面の観察からは重複関係を立証できなかった。更に床面に若干の段差が認められるものの、貼床は完全に連続しており、また、新旧の炉も一直線状になることから、北側への拡張の可能性もある。全体としての規模は長軸推定７m、短軸６mの不整楕円形となる。北側に存在するＳＴ13との重複は、両住居の狭間に双方より新しい風倒木痕がかかるが、精査段階での平面確認から新ＳＴ12・旧ＳＴ13という時間差が推測された。壁の立ち上がりは、ＳＴ13および風倒木痕と切り合う北側で不明瞭となる。南側でも検出段階では比較的明瞭にプランが確認されたが、立ち上がりが緩やかなため最終的に不明瞭な状態となっている。遺存状態の良好な東西両辺でも立ち上がりは比較的緩やかである。床面には、黄橙色シルトを基調に灰褐色シルトが少量混じる硬くしまった貼床が全面に施される。床面までの掘り込みは、深い所で33cmを測る。

ＳＴ13を切る

床面からは74基の柱穴または周溝の一部とみられる遺構が検出された。壁柱穴的に巡る状況もみられるが、主柱穴の組み合わせ等も含めさらに検討を要する。

複式炉（ＥＬ41）は住居の北西寄りに築かれている。軸線は南東－北西で、規模は、長軸1.7m、幅は土器埋設部が85cm、燃焼部が1.1m、床面からの深さが燃焼部で30cmを測る。埋設土器（第30図５）から本竪穴住居跡の所属時期は縄文時代中期末葉と考えられる。この炉の南に接して、貼床の下から炉がもう１基が検出された。残存部分の規模は、長軸1.3m、燃焼部の幅が83cm、床面からの深さ燃焼部で35cmである。燃焼部の南に被熱した礫群があるが、土器埋設部は未検出である。この炉は、構造的に新しい炉と類似しており、大きな時間差はないものと考えられる。また、燃焼部から埋設土器（第30図２）が検出された。新しい炉にある時期伴っていたものと考えられる。

直線状に並ぶ新旧の複式炉

ＳＴ13（第10図　写真図版９）

Ａ区59～61－129～131区で検出された。検出面は南半域が暗褐色砂質シルトで、北半域が礫を含む褐色砂質シルトである。検出時の平面形は不整形で、覆土は黒褐色砂質シルトに５cm大から人頭大の礫が非常に多く混入した状態である。ＳＴ10群と酷似する様相を呈する。南側でＳＴ12および風倒木痕に切られている。

覆土中に多量の礫が混入

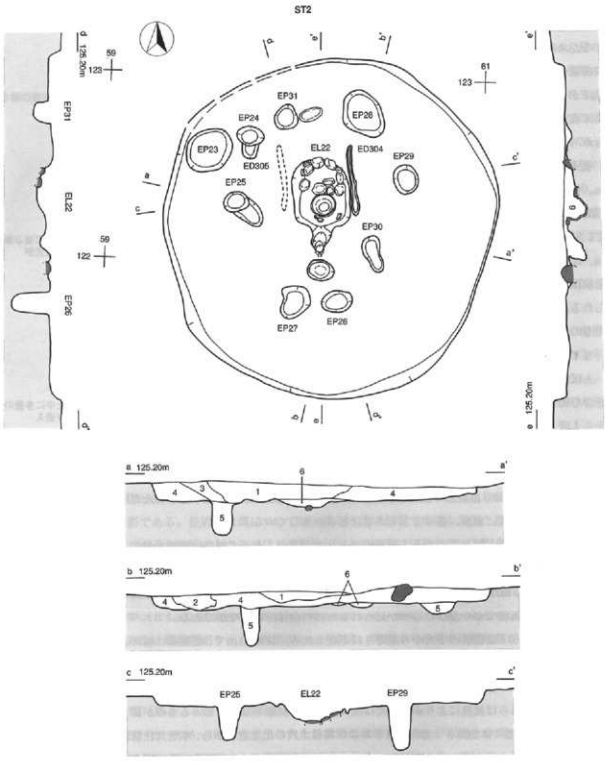
規模は東西５m、南北4.4mを測り、元来は楕円形プランの住居と考えられる。主柱穴であるＥＰ153・199・200は、直径25～30cm、床面からの深さ60～65cmで、覆土は小礫を含んだ灰黄褐色砂質シルトである。底面、掘り方とも非常にしっかりしている。

検出面から30cmほど掘り込んだところを床面としているが、その大部分は風倒木痕によって壊され、貼床の面はＥＰ199・200の辺りにわずかに残存している。壁面が明瞭に確認できるのは、複式炉（ＥＬ197）が位置する付近からＳＴ12に接する間の南東壁に限られる。床面からの立ち上がりは、西壁でやや急なところが見られるものの全体的に緩やかである。

複式炉（ＥＬ197）は住居の中央から東寄りに形成される。長軸2.1mで、燃焼部は幅70cm、床面からの深さ28cmを測る。埋設土器を囲む石組は、整然と密に配置される。燃焼部と前庭部の側壁は、20～30cmの細長礫や扁平礫を主に組まれている。燃焼部の底面には拳大ほどの角礫を配している。それらは被熱により赤褐または黒に変色し、剥離や分裂しているものが目立つ。ＥＬ197の埋設土器（第33図３・第34図１）および堆積土内の出土遺物から、本竪穴住居跡の所属時期は縄文時代中期末葉と考えられる。また、前庭部南側壁では、石組最上段に組み込まれた打製石斧（写真図版88－18）が出土した。

ＳＴ16（第11図　写真図版10）

Ａ区65・66－128～130区で検出された。検出面は南東部が暗褐色および灰褐色砂質シルトで、北西部が礫を含む暗褐色砂質シルトである。東辺部分が調査区外となる。西および北辺部でＳＧ９落ち込みにかかり、検出が困難となるが、ほぼ円形に近い平面形と推察された。覆土は黒



0 1m
(1:40)

ST2

1	10YR3/1 黒褐色シルト	炭化物・土器片混入
2	10YR2/2 黒褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色微砂質シルトがまだら状に混入
3	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色微砂質シルトがごく少量混入・炭化物が流れ込むように混入
4	10YR2/2 黒褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色微砂質シルトが少量混入

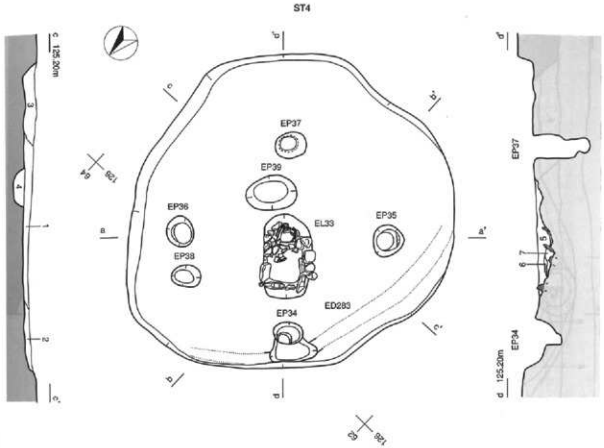
EP23～31・ED304, 305

5	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色微砂質シルトがまだら状に混入

EL22

6	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR5/6黄褐色微砂質シルトがまだら状に混入

第4図 ＳＴ２



0 1m
(1:40)

ST4

1	10YR2/2 黒褐色シルト	炭化物有り
2	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色微砂質シルトがごく少量混入
3	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色微砂質シルトが1～2cm大の粒状に混入

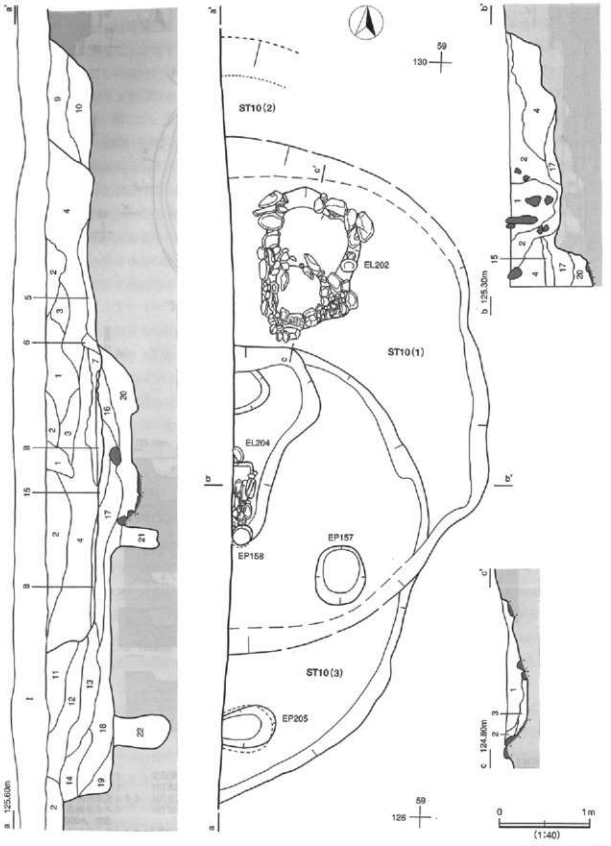
EP34～38

4	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	10YR6/6明黄褐色微砂質シルトが1cm大の粒状に混入

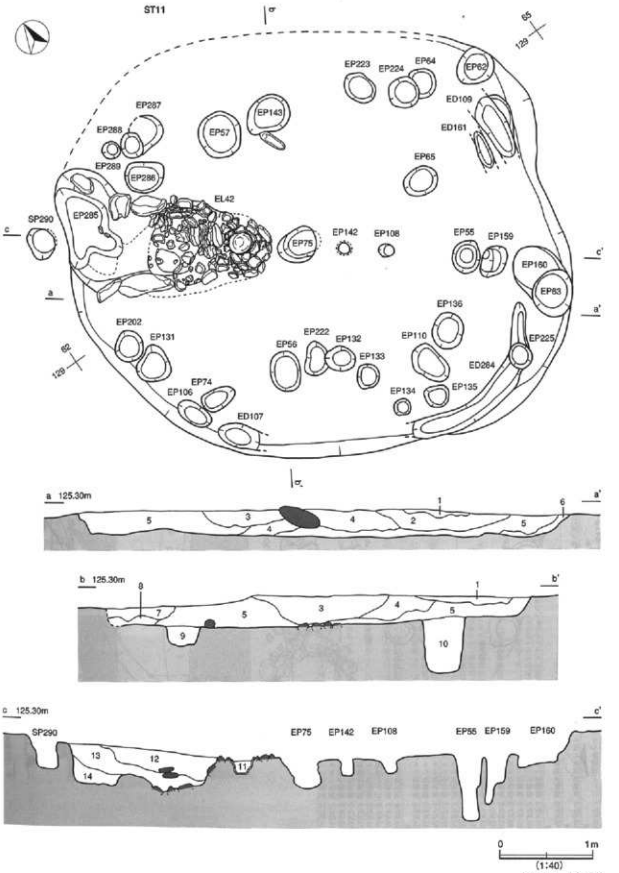
EL33・EP39

5	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR5/6黄褐色微砂質シルトがごく少量混入・炭化ブロック有り
6	N2/0 黒色シルト	7.5YR5/4にぶい黄褐色微砂質シルト少量混入
7	7.5YR5/4 にぶい黄褐色微砂質シルト	10YR3/2黒褐色砂質シルトがまだら状に混入・炭化物有り

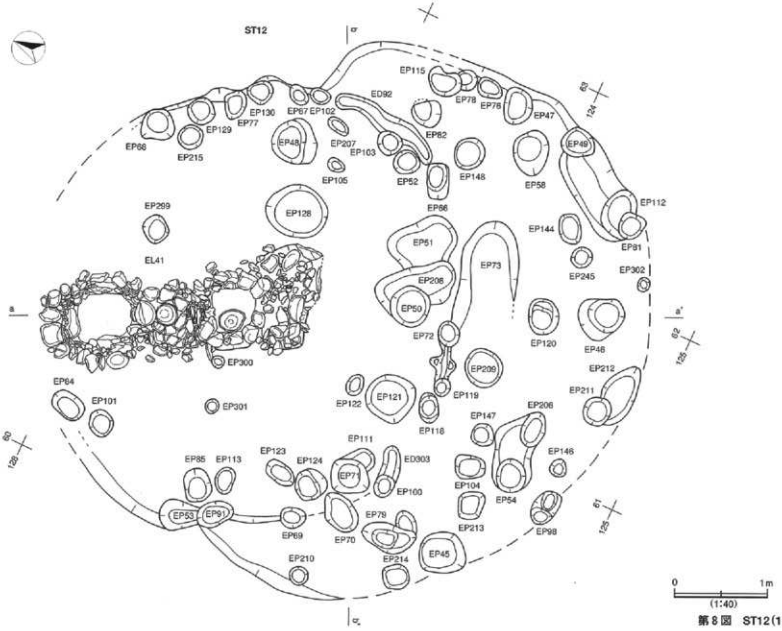
第5図 ＳＴ４



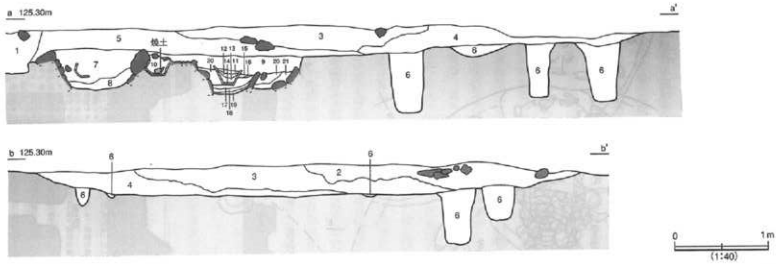
第6図 ＳＴ10



第7図 ＳＴ11



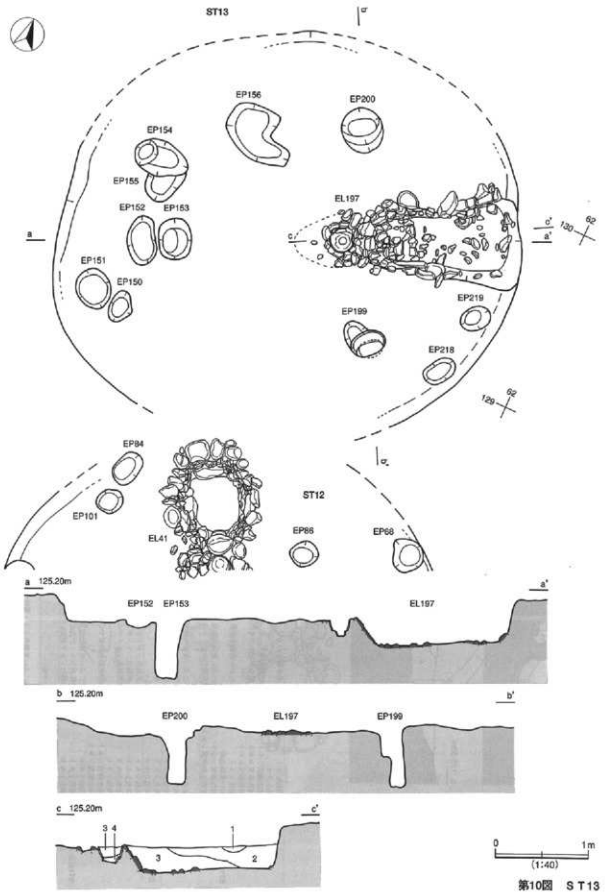
第8図 ST12(1)



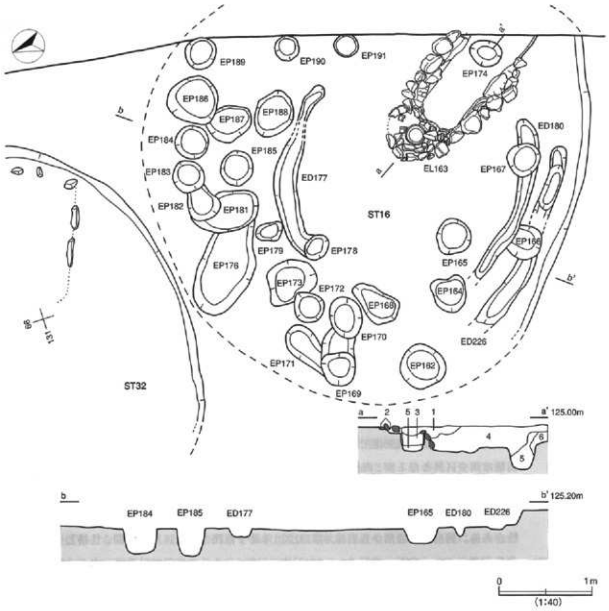
第9図 ST12(2)

	1	10YR3/2 黒褐色シルト	耕作土＝基本層序の Ⅰ
	1	10YR2/1 黒色シルト	
	2	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	全体に炭化物有り
	3	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色シルトがまだら状に混入
	4	10YR3/3 暗褐色砂質シルト	
	5	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトが少量混入
ST10(1)	6	10YR4/3 にぶい黄褐色砂	
	7	10YR3/3 暗褐色砂質シルト	10YR6/3にぶい黄褐色砂質シルトが大きなまだら状に混入
	8	10YR5/6 明黄褐色微砂質シルト	10YR3/2黒褐色砂質シルトが帯状に混入・脆弱
	EL202		
	1	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトがブロック状に一部混入・炭化物有り
	2	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR2/1黒褐色シルトがまだら状に少量混入
	3	10YR3/1 黒褐色シルト	10YR3/2黒褐色シルトがまだら状に少量混入・炭化物，焼土が底面に有り
	9	10YR3/3 暗褐色シルト	炭化物・植物根有り
ST10(2)	10	10YR3/3 暗褐色シルト	4より明るい
	11	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR3/1黒褐色シルトが下層部に混入
	12	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR3/1黒褐色シルトが大きなまだら状に混入
	13	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR3/1黒褐色シルトが大きなブロック状に混入
	14	10YR3/3 暗褐色シルト	
	15	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR6/6明黄褐色砂質シルトが少量混入
	16	10YR3/3 暗褐色粘質シルト	
	17	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトが少量混入
ST10(3)	18	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR4/4褐色シルトが2cm大の斑点状に混入
	19	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR4/4褐色シルトが5cm大の斑点状に混入
	EL204		
	20	10YR3/3 暗褐色粘質シルト	16より やや暗い
	EP158		
	21	10YR3/2 黒褐色粘質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色シルト質砂才2～3cm大の斑点状に混入・小礫有り
	EP205		
	22	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質砂	10YR3/2黒褐色粘質シルトがまだら状に混入

	1	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト	風倒木痕
	2	10YR2/1 黒色砂質シルト	10YR3/2黒褐色砂質シルトが下層部に少量混入・炭化物有り
	3	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトがまだら状に少量混入・炭化物有り
	4	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトがごく少量混入
	5	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR2/1黒色砂質シルトが5～10cm大のブロック状及びまだら状に混入
	全てのEP		
	6	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	10YR6/6明黄褐色微砂質シルトがまだら状または少量混入
	EL41群		
	7	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルトが3cm大のブロック状に混入 炭化物，2～5cm大の塊有り
	8	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR6/6明黄褐色砂質シルトが少量混入・3～5cm大の塊有り
	9	10YR3/3 暗褐色シルト	
ST12	10	10YR3/2 黒褐色砂質シルト	7.5YR5/6明黄褐色微砂質シルトがブロック状に混入
	EL41群		
	11	10YR4/2 灰黄褐色シルト	10YR6/6明黄褐色微砂質シルトとN1.5/黒色シルトがまだら状，7.5YR4/4褐色シルトがブロック状に混入
	12	10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト	
	13	N1.5/0 黒色シルト	
	14	10YR4/2 灰黄褐色砂	
	15	7.5YR4/4 褐色砂質シルト	
	16	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト	10YR6/6明黄褐色微砂質シルトが1cm大のブロック状で10所に混入 脆り状
	17	10YR4/2 灰黄褐色シルト	
	18	10YR4/2 灰黄褐色シルト	10YR6/6明黄褐色微砂質シルトがまだら状に混入
	19	10YR3/2 黒褐色粘質シルト	10YR6/6明黄褐色微砂質シルトが1cm以くらいの細い横線状に少量混入
	20	10YR4/2 灰黄褐色シルト	10YR6/6明黄褐色シルトと7.5YR4/4褐色シルトがまだら状に混在
	21	10YR4/2 灰黄褐色シルト	10YR6/6明黄褐色シルトが2mm大の斑状に混入



第10図　ＳＴ13



第11図　ST16・ST32

	EL163			
	1	10YR3/3 黒褐色シルト		
	2	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入し、7.5YR5/4にぶい褐色ローム土が下層部に混入	
ST16	3	10YR4/2 にぶい黄褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色シルトがまだら状に混入	
	4	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトが下層部に1cm大の炭点状に混入	
	5	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト	10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトがまだら状に混入	
	6	10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト	10YR4/2灰黄褐色シルトが5cm大のブロック状に混入	
	1	10YR3/1 黒褐色シルト		
	2	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR6/4にぶい黄褐色微砂質シルトと10YR2/1黒色シルトが下層部に帯状に混入	
	3	2.5Y2/1 黒色シルト		
	4	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR6/4にぶい黄褐色微砂質シルトが5cm大のブロック状に混入	
	5	10YR4/2 灰黄褐色シルト		
	6	10YR4/2 灰黄褐色シルト	10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルトが5～10cm大のまだら状に混入	
	7	10YR4/1 暗灰色シルト		
	8	10YR7/4 にぶい黄褐色粘質シルト	10YR4/1黒灰色粘質シルトが大きなまだら状に混入	
ST11	EP87・143・203			
	9	10YR4/1 暗灰色シルト	10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト(亀山)と10YR6/4にぶい黄褐色砂質シルトがまだら状に混入	
	上層以外のEP			
	10	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR6/6明黄褐色微砂質シルトが少量混入	
	EL42			
	11	7.5YR3/1 黒褐色シルト	N2/0黒色粘質シルトが埋設土器底面部分に有り	
	12	10YR3/2 黒褐色シルト	10YR5/6黄褐色微砂質シルトが5cm大の微点状に混入・炭化物有り	
	13	10YR3/2 黒褐色シルト	1より黒みが強い	
	14	10YR4/2 灰黄褐色シルト	10YR5/6黄褐色微砂質シルトがごく少量混入	
	EL197			
	1	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	10YR4/6褐色砂質シルトがまだら状に混入	
ST13	2	10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト	炭化ブロック有り	
	3	10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト	10YR3/1黒灰色シルトが5cm大のブロック状に混入し、10YR5/4にぶい黄褐色シルトが1cm大の粒状に混入	
	4	N2/0 黒色シルト	7.5YR3/4暗褐色微砂質シルト＋焼土が帯状に混入	

褐色砂質シルトを主体とする。検出部分での規模は、東西４ｍ、南北4.7ｍを測る。検出面から17cmほど掘り込んだところを床面とするが、壁面が明瞭に確認できるのは南辺のみである。貼床は中央から南では比較的しっかりとしている。

床面では31基の柱穴、溝が検出された。他の竪穴住居跡に比較して柱穴が浅く、主柱穴の確定には未だ検討を要するが、壁の内側に巡らされた溝が特徴的である。

複式炉（ＥＬ197）は住居の中央から南東寄りに検出された。前庭部が調査区外となるが検出部分で長軸1.7ｍ、燃焼部は幅1.1ｍ、床面からの深さ20cmを測る。土器埋設部は幅75cmを測る。ＥＬ163の埋設土器（第34図３）および堆積土内の出土遺物から、本竪穴住居跡の所属時期は縄文時代中期末葉と考えられる。また、住居北側のＥＰ176では石棒が直立した状態で出土している（第129図２）。

直立して出土した石棒

ＳＴ32（第11図　写真図版10）

Ａ区64～66－131～132区で検出された。ＳＴ16の北に隣接する。ＳＴ16の精査中にＳＧ９堆積土中から検出された。検出面は礫を多量に含む暗褐色砂質シルトである。検出場所が現状保存の対象となった区域のため、住居南辺の一部と炉とみられる石組みの上面の検出にとどめた。平面形は楕円形または円形と推察された。

Ｂ　配石遺構

ＳＭ234（第12図　巻頭写真５　写真図版29）

Ａ区49～51－154～156区で検出された。検出面は酸化鉄を含む暗赤褐色砂質シルト層である。西側は調査区外となるが、直径約4.7ｍの範囲に長径40～80cmの大型の扁平および棒状となる礫を主体として、それらが環状に配置された状態で検出された。検出段階ではほとんどの礫が環の中央に向かって斜めに重なった状態で検出されたが、機能時には、各礫が直立していた可能性がある。列石の東端部から石棒（第131図１）が１点出土した。所属時期、性格ともに不明である。

環状の立石群

ＳＭ233（第13図　巻頭写真５　写真図版28）

Ａ区59・60－136・137区で表土剥ぎ取りの段階で検出された。検出面は礫を多量に含む暗褐色砂質シルト層である。東西・南北とも約３ｍの範囲に長径30～50cmの扁平な礫を主体に平坦に敷きつめている。当初敷石住居跡とも思われたが、礫以外の構造物が検出されず、所属時期、性格ともに不明である。

敷石遺構

ＳＭ306（第13図　写真図版28）

Ａ区66～68－149～151区で検出された。検出面はややグライ化した暗灰色粘土質シルト層である。東西・南北とも約４ｍの範囲に長径20～50cmの扁平な礫を主体に平坦に敷きつめている。礫の密度はＳＭ233に比較して疎である。所属時期、性格ともに不明である。

Ａ区西辺北半配石・列石遺構群（第14図　写真図版18～21）

Ａ区54～59－143～151区付近を中心に検出された配石・列石遺構群である。検出面は酸化鉄と小礫を含む暗赤褐色粗砂層である。長径15～50cmの扁平または棒状の礫の縁辺部を押し立て、２列１組または１列を基本に直線状、弧状に配置した列石、それらを「Ｖ」字、「ハ」字等に組み合わせた配石を基本単位とする。更に、棒状の礫を突き立てた立石と有機的に組み合う配石

も多くみられる。全体の配置をみると、この範囲内には他にも人為的な列石、立石が単独で多数存在し、非常に複雑な様相を呈する。以下に配石・列石群を構成する主なものについて概述する。

ＳＭ241　56・57－146・147区で検出された（第15図　写真図版23）。軸線は北東から南西方向で長軸長1.6ｍ、最大幅90cmを測る。２列１組の列石をＶ字形に組み合わせた形態となる。列石が集約する部分にピットが検出された。立石が抜けた痕跡と考えられる。ＳＭ241の南辺を構成する列石と同一の軸線上に高さ26cmの立石をはさんで２列５個の列石が検出された。

Ｖ字形の配石

ＳＭ249　55－146・147区、ＳＭ241の北西に隣接して検出された（第15図　写真図版23）。形は崩れているが、高さ24cmと35cmの２基の立石と２条の列石の組み合わせで構成される形態となる。軸線は北東から南西方向で、規模は長軸長2.1ｍ、最大幅１ｍを測る。

ＳＭ243　58－147区で検出された（第15図　写真図版22）。軸線は北西から南東方向で長軸長１ｍ、最大幅66cmを測る。矢印形に配置された列石の集約する部分に棒状の立石がある。

ＳＭ244　58－146区で検出された（第15図　写真図版22）。ＳＭ243の南西に隣接する。軸線は北西から南東方向で、長軸長1.7ｍ、最大幅90cmを測る。この配石もＶ字形の列石の集約部分に立石を伴う。東の列石に比較して西側の列石が極端に短くなっているが、軸線および南北の列石の方向にはそれぞれＳＭ243と平行関係が認められる。

ＳＭ243と軸線が平行する

ＳＭ272　56－145区で検出された（第15図　写真図版23）。軸線はほぼ南北方向で軸長70cm、最大幅50cmを測る。１列１組の列石をハ字形に組み合わせた形態となる。

ＳＭ270　57－145区、ＳＭ272の東に隣接して検出された（第15図　写真図版23）。軸線はほぼ北から南方向で軸長95cm、最大幅73cmを測る。形は崩れているが２列１組の列石をハ字形に組み合わせた形態となる。

ＳＭ279・280・281・282　54・55－147・148区で検出された（第16図　写真図版27）。西半部が調査区外となるが、１列１組の列石を弧状または環状に配置したものが複雑に組み合わされた形態となる。円弧状に検出されたＳＭ280の直径は2.2ｍを測る。便宜上４つの遺構に分けたが一連のものである可能性もある。

円弧状の列石

ＳＭ246・248・254　56～58－147・148区で検出された（第16図　写真図版25）。２列１組、１列１組の直線状の列石、扁平な敷石、立石の組み合わせで複雑な形態となる。前述ＳＭ279～282と同様に相互に関連した遺構の可能性がある。

ＳＭ274　56－145区で検出された（第17図）。ＳＭ272の北に隣接する。一部が２列１組となる弧状の列石と敷石が組み合わされた形態となる。東西55cm、南北70cmの規模をもつ。

ＳＭ278　58－147区で検出された（第17図）。ＳＭ254の南に隣接する。１列１組で北東辺がひらくコ字形の配石である。南西辺1.5ｍ、北西辺1.3ｍの規模をもつ。南東辺からＥＵ116が出土している。

ＳＭ297　56・57－150・151区で検出された（第17図）。敷石状の配石である。検出面はやや高く、Ⅵ層下面である。15～30cmの扁平な礫を主体に東西70cm南北90cmの規模をもつ。

ＳＭ298　59－146区で検出された（第17図）。敷石状の配石である。15～30cmの扁平な礫を主体に東西、南北各80cmの規模をもつ。

ＳＭ256　57－149区で検出された（第17図　写真図版26）。長径45cmと48cmの２対１組の扁平

な礫に小型の立石をともなう配石遺構である。

ＳＭ296　57－148区で検出された（第17図　写真図版26）。直径５～15cmの小型の扁平礫を主体として、２列１組を直線状に配置した列石である。軸線は南東から北西方向で、軸長55cm、幅12cmを測る。

ＳＭ263　59－149区で検出された（第17図）。長径17～50cmの扁平礫を南辺がひらくコ字形に配置した配石である。規模は南北１ｍ、東西87cmを測る。

ＳＭ275　56・57－144・145区で検出された（第17図）。長径20cm未満の小形の扁平礫を主体として、南が開く楕円形に配置した配石である。規模は南北１ｍ、東西70cmを測る。

ＳＭ269　57－146区で検出された（第17図）。ＳＭ244の西に隣接する。長径５～35cmの礫が乱雑に検出されたが、その中で長径20cm以上の扁平礫が2列1組で「く」字形に配置される。

ＳＭ251　56－147・148区で検出された（第17図　写真図版24）。ＳＭ244の西に隣接する。長径５～35cmの礫が乱雑に検出されたが、その中で長径20cm以上の扁平礫が２列１組で「く」字形に配置される。

ＳＭ257・258・259・260　57・58－149～151区で検出された（第17図　写真図版26）。２列１組の直線状（ＳＭ257）、１列１組の「く」字状（ＳＭ260）の列石と、立石をともなうもの（ＳＭ258・259）が径2.4ｍの範囲に集中して検出されたが、相互の関連性については不明である。

ＳＭ277　55－148区で検出された（第17図　写真図版27）。軸線は北東から南西方向で軸長1.4ｍ、最大幅1.2ｍを測る。２列１組の列石をハ字形に組み合わせた形態でそれら２条の列石の間に敷石状に扁平礫が配置される。

ＳＭ276・295　54・55－148・149区でＳＭ277の東西に隣接して検出された（第17図）。検出面がⅥ層下面であることから、ＳＭ277との関連性は低いと考えられる。

Ｃ　土坑・埋設土器

土坑の分布は、Ａ区南半の竪穴住居域には疎で、大半は北西部の配石遺構群の分布域で検出された。特にＳＭ234の周辺には、埋設土器や焼けた石組みをともなった土坑が多く分布する。以下に主な土坑の概要を述べる。

ＳＫ７（第18図　写真図版37）

Ａ区58－125・126区、ＳＴ10の南に隣接して検出された。検出面は暗褐色砂質シルトである。西半は調査区外となるが、楕円形または円形の平面形となる所謂フラスコ状土坑と考えられる。検出部分での最大径は3.1ｍ、確認面からの深さは57cmを測る。壁面の状況は開口部が比較的緩やかに傾斜し、深さ20cm付近からオーバーハングする。底面は平坦である。遺物は縄文時代中期末棄の土器片が若干出土している。

フラスコ状土坑

ＥＵ228（第18図　写真図版36）

Ａ区64－134区ＳＧ９堆積土上面で検出された。土器（第45図１）は横倒しの状態で出土し上面は失われていた。斜縄文と撚糸文が同一器面上に施された深鉢体部下半である。

ＥＵ230（第18図　写真図版36）

Ａ区64－132・133区ＳＧ９堆積土上面で検出された。土器（第44図３・第45図３）は正位の状態で２個体分が３重に出土した。いずれも斜縄文が施された深鉢体部下半である。

ＥＵ43（第18図　写真図版36）

Ａ区62－155区で検出された。確認面は暗褐色粘土質シルトである。土器（第36図１）は正位の状態で出土した。斜縄文が施された深鉢で、底部から約30cmが遺存している。

ＥＵ231（第18図　写真図版36）

Ａ区72－153区で検出された。確認面は暗褐色粘土質シルトである。土器は深鉢の体部下半が正位の状態で検出されたが、風化が著しく図化に至らなかった。

ＥＵ232（第18図　写真図版36）

Ａ区61－157区で検出された。確認面は暗褐色粘土質シルトである。土器（第44図２）は深鉢の体部下半の約半分が正位の状態で検出された。

ＥＵ97（第18図　写真図版36）

Ａ区北西角49－158区で検出された。ＳＭ234を取り囲む埋設土器群の北端に位置する。確認面は暗褐色砂質シルトである。土器（第40図３）は深鉢底部が正位の状態で検出された。

ＥＵ96（第18図）

Ａ区49－158区、ＥＵ97の南１ｍで検出された。確認面は暗褐色砂質シルトである。土器（第40図２）は深鉢底部が正位の状態で検出された。

ＥＵ95（第18図　写真図版31・33）

Ａ区49・50－157区、ＥＵ96の南80cmで検出された。確認面は暗褐色砂質シルト（Ⅶ層）である。ＥＵ95から97はほぼ一直線に並ぶ。土器（第41図１）は深鉢体部上半が逆位の状態で検出された。土器内部に被熱した破砕礫が詰め込まれ、底面付近には径25cmの扁平礫が敷かれている。器形および器表面の文様から縄文時代後期前葉に所属するものと考えられる。

土器内部に詰め込まれた破砕礫

ＳＫ94（第18図　写真図版31・33）

Ａ区50－157・158区、ＥＵ95の東70cmで検出された。確認面は暗褐色砂質シルト（Ⅶ層）である。長軸長98cm、短軸長61cm、確認面からの深さ25cmの不整楕円形の土坑で長軸はほぼ南北方向である。底面は丸く壁面の立ち上がりは緩やかである。土器（第40図１）は円筒形の大型深鉢で口縁部を下に土坑底面に寝かされた状態で検出された。底部は穿孔されている。土器の東側面には被熱した破砕礫が配置される。

ＳＫ44（第18図　写真図版32）

Ａ区51－157区、ＳＫ94の南東2.3ｍで検出された。確認面は暗褐色砂質シルトである。長軸長82cm、短軸長55cm、確認面からの深さ36cmの不整楕円形の土坑で長軸はほぼ南北方向である。底面は擂鉢状を呈し、壁面の立ち上がりは緩やかである。埋設土器（第37図１）は底部が欠損する大形の深鉢で口縁部を下に土坑壁面に立てかけた状態で検出された。埋設土器の北掘り方覆土には５～10cmの礫が詰め込まれている。

ＳＫ99（第18図　写真図版36）

Ａ区52－157区、ＳＫ44の南東1.7ｍで検出された。確認面は暗褐色砂質シルトである。径40cm、深さ15cmの不整円形の土坑である。底面は丸く、壁面の立ち上がりは緩やかである。底面から土器（第41図２）がつぶれた状態で出土した。

ＳＫ60（第18図　写真図版36）

Ａ区52－156区、ＳＫ99の南1.5ｍで検出された。確認面は暗褐色砂質シルトである。径50cm、

深さ26cmの円形の土坑である。底面は丸く、壁面の立ち上がりは緩やかである。埋設土器（第38図１）は底部が欠損した大型の深鉢で、口縁部を下に土坑壁面に立てかけたＳＫ44に類似した状態で検出された。

ＥＵ89（第19図　写真図版30）

Ａ区52－153区で検出された。確認面は小礫を含む暗褐色砂質シルトである。埋設土器（第39図１）は深鉢底部が正位で出土し、その周囲は長径10～20cmの扁平礫で囲まれる。

ＥＵ90（第18図　写真図版33）

Ａ区51－153区、ＥＵ89の西1.5mで検出された。確認面は小礫を含む暗褐色砂質シルトである。埋設土器（第39図３）は深鉢口縁部が逆位で出土し、その周囲および底面に焼土が観察されたが、土器自体の被熱痕は顕著ではない。

土坑内面被熱

ＥＵ88（第19図　写真図版32）

Ａ区52－153区、ＥＵ89の南東1.8mで検出された。確認面は小礫を含む暗褐色砂質シルトである。埋設土器（第39図２）は深鉢体部が正位で出土した。

ＳＫ93（第19図　写真図版30）

Ａ区52－152区、ＥＵ88の南に隣接して検出された。平面形「ロ」字形を呈し、東西1.1m、南北70cm、確認面からの深さ30cmの規模で、周囲および壁面に石組みをともなう。土坑内面は著しく被熱している。

土坑内面被熱
石組み

ＳＫ203（第19図　写真図版35）

Ａ区53－152区、ＳＫ93の東２mで検出された。東西90cm、南北70cm、深さ20cmの不整楕円形を呈する。底面には径５～15cmの礫が敷きつめられる。土坑内面は著しく被熱している。

土坑内面被熱

ＥＵ87（第19図　写真図版32）

Ａ区54－152区、ＳＫ203の東２mで検出された。確認面は小礫を含む暗褐色砂質シルトである。埋設土器（第36図３）は深鉢体部下半が正位で出土し、周囲に配石をともなう。

ＥＵ198（第19図）

Ａ区56－151区、ＥＵ87の南東３mで検出された。確認面は小礫を含む暗褐色砂質シルトである。埋設土器は大型の深鉢体部の内側に第45図２が入れ子の状態で出土した。

ＥＵ192（第19図　写真図版34）

Ａ区56－151・152区、ＥＵ198の北東に隣接して検出された。確認面は小礫を含む暗褐色砂質シルトである。埋設土器は深鉢体部の約半分が正位で出土した。

ＥＵ194（第19図　写真図版37）

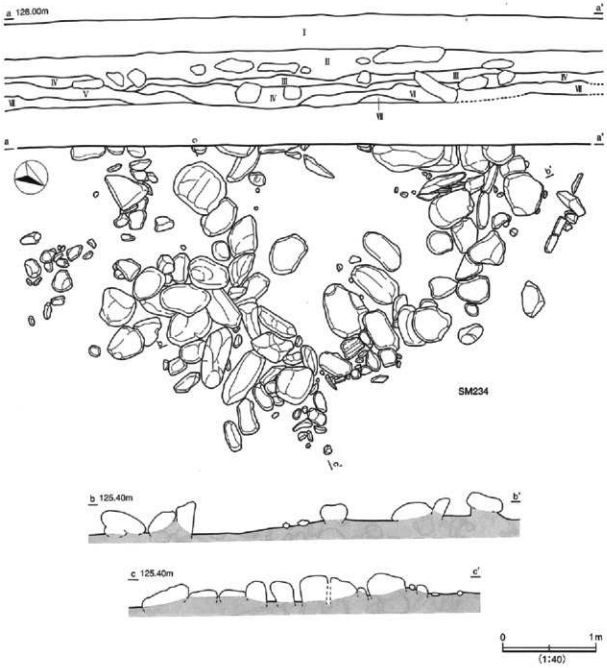
Ａ区56－152区、ＥＵ192の北東２mで検出された。確認面は暗褐色砂質シルトである。埋設土器（第43図２）は底部の無い深鉢が正位で出土した。南辺を除く周囲に配石をともなう。

ＥＵ195（第19図　写真図版35・37）

Ａ区56－153区、ＥＵ194の北１mで検出された。確認面は暗褐色砂質シルトである。埋設土器（第44図４・５）は底部の無い深鉢が正位で出土した。

ＥＵ116（第18図　写真図版34）

Ａ区58－148区、ＳＭ278の列石の並びで検出された。埋設土器（第42図１）は完形の大型の深鉢が正位で出土した。



Ａ区基本層序

Ⅰ　10YR3/2 黒褐色シルト　　しまり　やや強い　粘性　弱い
（炭化物少量含む）

Ⅱ　10YR2/2 黒褐色シルト　　しまり　中　粘性　弱い
（10YR3/3暗褐色砂質シルトを微量 水田耕作土か？）

Ⅲ　10YR2/1 黒色シルト　　しまり　中　粘性　弱い
（開炭質 10YR4/6褐色砂礫をまだら状に、炭化物少量含む 水田耕作土の一部か）

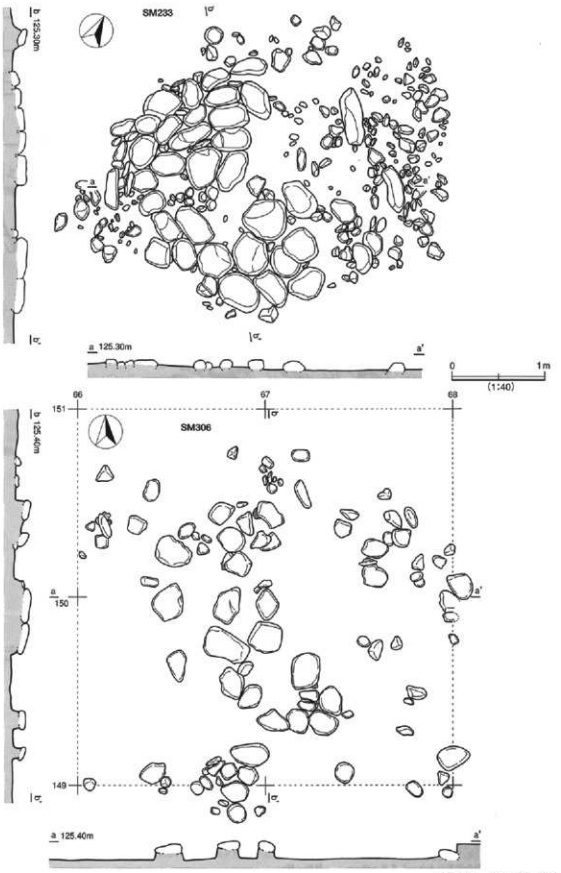
Ⅳ　10YR3/3 暗褐色シルト　　しまり　弱い　粘性　やや弱い
（10YR4/6褐色砂質シルトをまだら状に大量、10YR2/1黒色シルトをまだら状に少量、炭化物多量、礫少量含む ローム マウンドか水田床土）

Ⅴ　10YR2/2 黒褐色シルト　　しまり　中　粘性　弱い
（炭化物少量含む 自然堆積か？）

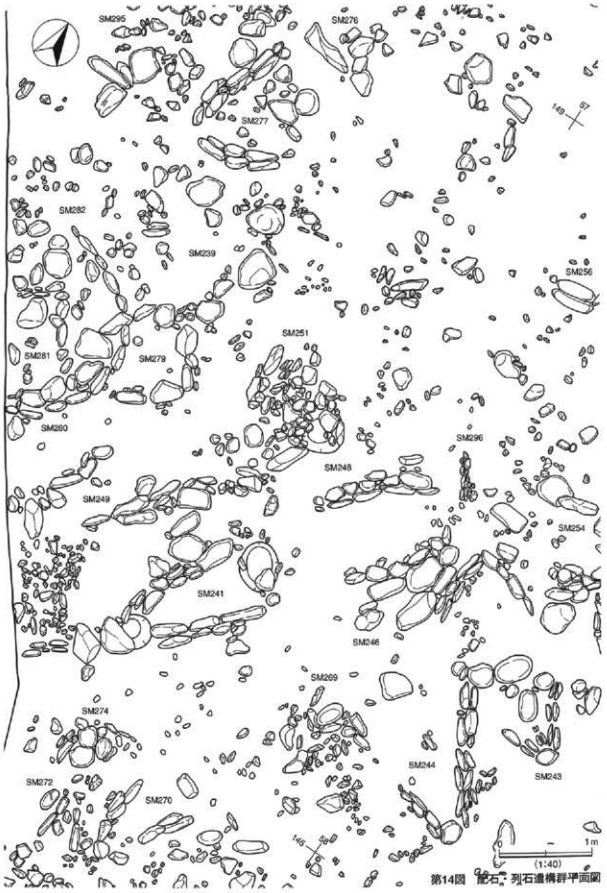
Ⅵ　10YR2/2 黒褐色シルト　　しまり　やや弱い　粘性　やや弱い
（炭化物多量含む 自然堆積か？）

Ⅶ　10YR3/3 暗褐色砂質シルト　しまり　中　粘性　弱い
（10YR3/4暗褐色砂ブロックをまだら状に、炭化物多量、礫少量含む ローム マウンドか人為層）

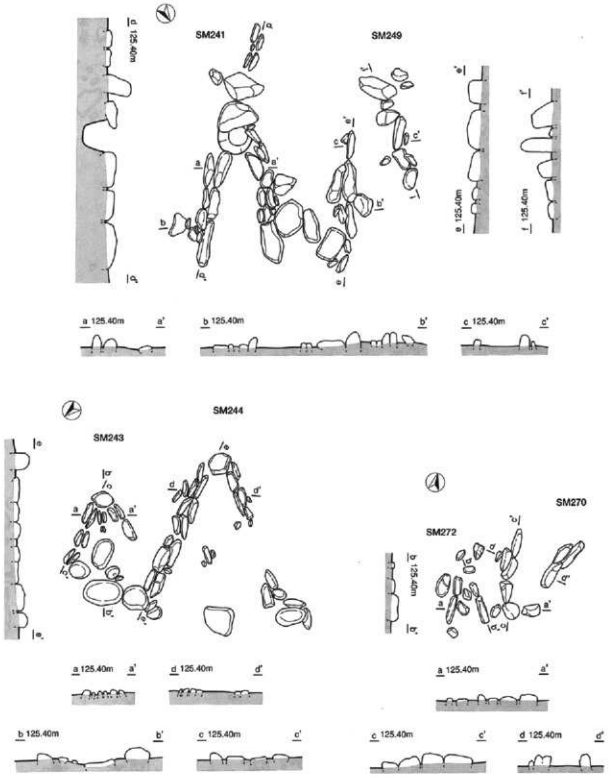
第12図　Ａ区基本層序・ＳＭ234



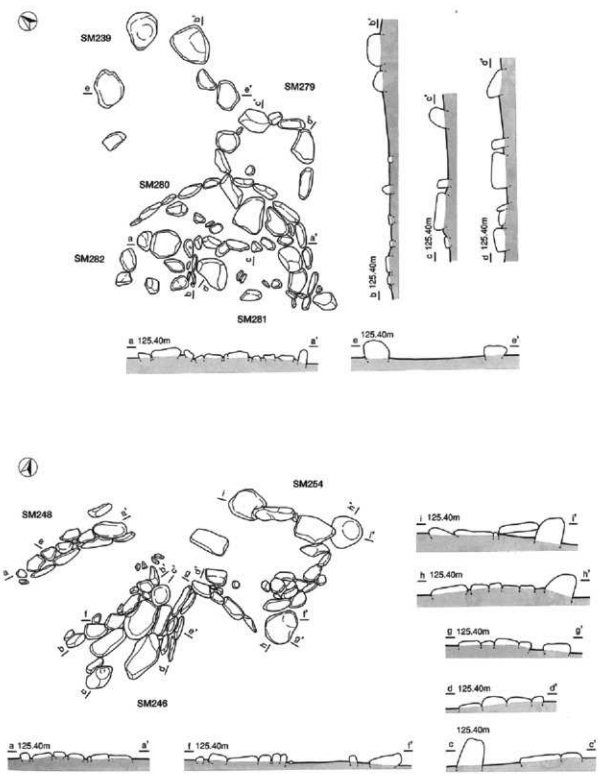
第13図　S M233・306



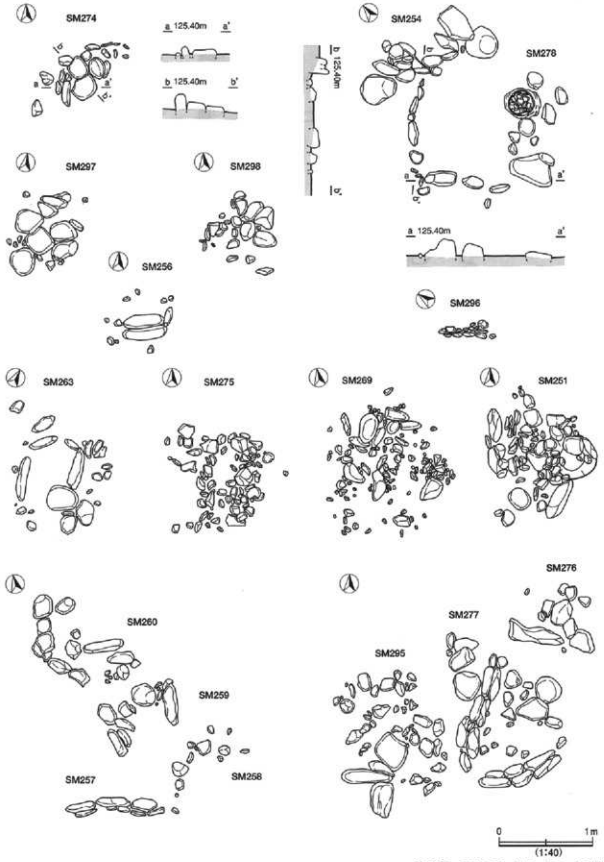
第14図　配石・列石遺構群平面図



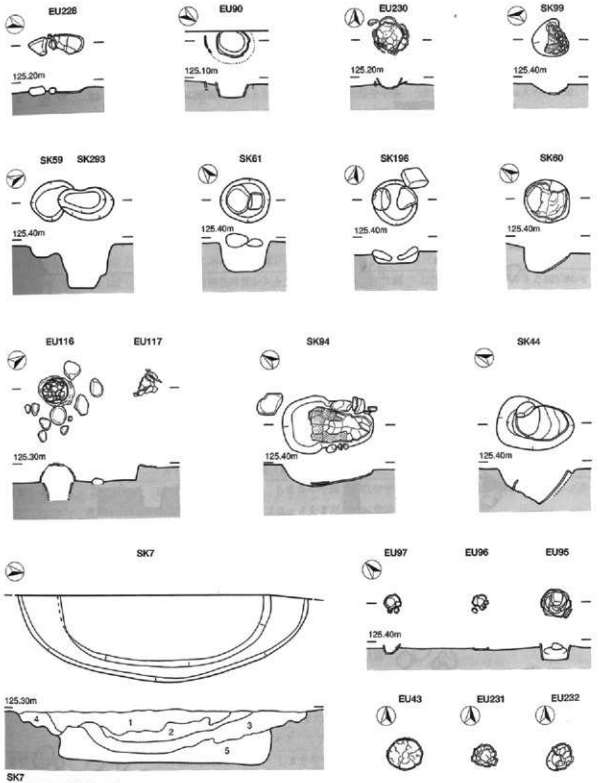
第15図　ＳＭ241・249・243・244他



第16図　ＳＭ280・281・282・279他

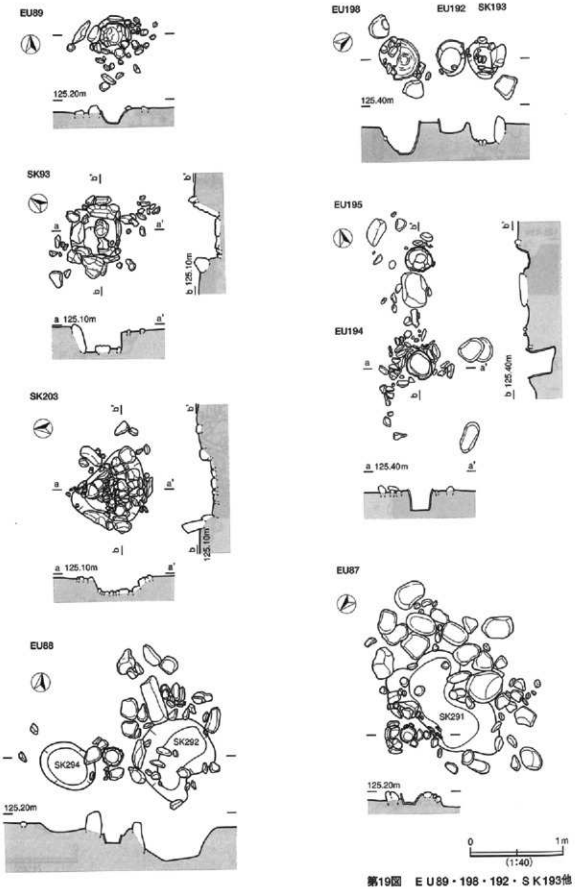


第17図　ＳＭ274・278・254・297他



SK7
1　10YR3/3 暗褐色シルト
　(10YR2/2黒褐色シルトがまだら状に混入 炭化物2～15cm大の礫・土器片有り)
2　10YR3/3 暗褐色シルト
3　10YR3/2 黒褐色シルト
　(多量の炭化物が上層部に混入 5cm大の礫・土器片有り)
4　10YR2/2 黒褐色砂質シルト
　(10YR4/4褐色微砂質シルトが少量混入)
5　10YR2/2 黒褐色砂質シルト
　(10YR4/4褐色微砂質シルトが1～2cm大の粒状に全体に混入)

第18図　ＥＵ228・90・230・ＳＫ99他



第19図　ＥＵ89・198・192・ＳＫ193他

表２　土層観察表

遺構	番号	地区	土層注記
ＳＫ	44	51-157 土坑	10YR3/2黒褐色シルト　しまり中　粘性やや弱　（炭化物多量、褐色砂、 明黄褐色シルトブロックを微量、大礫を上層に小礫を下層に含む）
ＳＫ	60	52-156 土坑	10YR2/2黒褐色シルト　しまりやや弱　粘性やや強　（炭化物少量、1～2cm大の礫微量、 下層に明黄褐色シルトを微量含む）
ＳＫ	61	58-150 土坑	10YR2/3黒褐色シルト　しまりやや弱　粘性弱　（炭化物少量、上部に礫含む）
ＳＫ	93	52-152 土坑	10YR3/2黒褐色砂質シルト　しまりやや弱　粘性やや弱　（炭化物少量、 10YR2/2黒褐色シルトブロック少量、褐色砂質土少量含む　人為層）
ＳＫ	94	50-157～158 土坑	1.10YR2/3黒褐色シルト　しまりやや弱　粘性弱　（炭化物微量含む） 2.10YR2/1黒色シルト　しまり弱　粘性弱　（炭化物少量、 10YR6/3にぶい黄橙砂質シルトを少量含む）
ＳＫ	99	52-157 土坑	10YR3/3暗褐色砂質シルト　しまりやや弱　粘性弱　（10YR2/3黒褐色シルトと10YR4/4 褐色砂質シルトをまだら状、炭化物少量、2.5YR3/4暗赤褐色シルトの焼土を微量含む）
ＳＫ	193	56-152 土坑	10YR3/3暗褐色シルト　しまり中　粘性弱　（炭化物少量、下部に礫含む） ＥＵ192を切る
ＳＫ	196	57-152 土坑	10YR2/2黒褐色シルト　しまり弱　粘性中　（炭化物少量、10YR5/4にぶい黄褐色 微砂少量含む）
ＥＵ	43	62-155 堀設土器	2.5YR3/1黒褐色シルト　しまりやや弱　粘性やや強 （炭化物多量、小礫微量、酸化鉄少量を含む）
ＥＵ	88	52-152 堀設土器	10YR2/1黒色シルト泥炭　しまり中　粘性弱 （10YR3/2黒褐色砂少量、炭化物多量含む）
ＥＵ	89	52-153 堀設土器	10YR2/2黒褐色シルト　しまりやや弱　粘性やや弱（上層中央に褐色砂質シルトブロック、 小礫微量、黒色シルトブロックをまだら状に少量、炭化物少量含む）
ＥＵ	90	51-153 堀設土器	10YR2/1黒色シルト　しまり弱　粘性やや強　（土器外縁部および下層部に 7.5YR3/4暗褐色の焼土あり、被熱している　炭化物多量に含む）
ＥＵ	95	49～50-157 堀設土器	10YR2/2黒褐色シルト　しまり中　粘性やや弱　（炭化物多量、20cm大の礫多量、 10YR3/3暗褐色微砂少量、10YR6/4にぶい黄橙色砂礫微量含む　人為層）
ＥＵ	116	58-148 堀設土器	10YR2/3黒褐色シルト　しまり中　粘性中　（炭化物少量、20cm大の礫含む）
ＥＵ	194	56-152 堀設土器	10YR2/3黒褐色シルト　しまりやや弱　粘性弱 （10YR5/6黄褐色微砂ブロック少量、炭化物少量含む）
ＥＵ	192	56-151～152 堀設土器	1.10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト　しまりやや強　粘性弱 （10YR6/4にぶい黄橙色微砂をまだら状、炭化物少量含む） 2.10YR2/2黒褐色砂質シルト　しまりやや弱　粘性弱　（炭化物多量含む）
ＥＵ	195	56-153 堀設土器	10YR2/3黒褐色シルト　しまりやや弱　粘性弱　（炭化物微量含む）
ＥＵ	198	56-151 堀設土器	10YR3/4暗褐色シルト　しまりやや弱　粘性弱　（炭化物少量、 上部に10YR2/3黒褐色シルト、下部に10YR2/1黒色砂質シルトと炭化物を多量に含む）
ＥＵ	228	64-134 堀設土器	10YR3/4暗褐色シルト　しまり弱　粘性弱 （下部に10YR3/3暗褐色砂質シルト、炭化物少量含む）

D　遺物包含層

遺物包含層は、B区の西半部とC区南半の南北トレンチの北半の２箇所で検出された。どちらも縄文時代晩期の遺物を主体に包含している。以下にそれぞれの概要を述べる。

B区遺物包含層（第20図　写真図版38～40）

B区は、地山面が東から西に緩く傾斜し、西半部分に黒色土が厚く堆積する。このうち、遺物包含層は調査区北西部に形成されており、今回B区から出土した遺物約100箱のほとんどは70～77－39～46区付近の約260㎡から出土した。この区域の土層の堆積状況を第20図に示した。Ⅰ・Ⅱ層は表土および耕作土で遺物の混入は希薄であり、Ⅲ層以下が遺物包含層となる。Ⅲ層は礫、炭化物を多量に含む黒色シルトで10～25㎝の厚さで堆積する。遺物は特に73～75－42～45区を中心として密に出土した。この区域では、縄文土器が小破片となって折り重なった状態となり（写真図版39）、出土量に比較して器形全体が把握できるものが少なかった。Ⅳ層は遺物の混入が少なく間層的に入るが、南東部に部分的に観察されたにとどまる。Ⅴ層は粘性の強い黒褐色シルトで40㎝前後の厚さで堆積する。Ⅴa層とした上層部分に遺物が集中し、面的には70～72－43・44区付近を中心に良好な状態で遺物が出土した（写真図版40）。Ⅲ層からⅤ層間における遺物の時期差は不明確である。

C区遺物包含層（第21・22図　写真図版41～46）

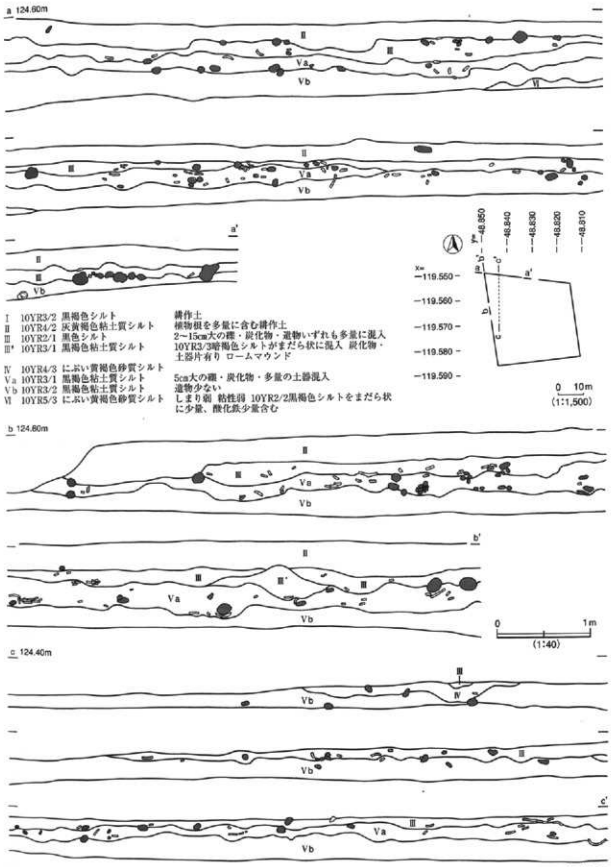
遺物包含層は、C区の南半に段丘崖に沿って設定されたトレンチの北端に近い部分、21～27－40～52区で検出された。南北約26m、東西約６ｍの範囲を精査したことになるが、調査区の東に設置した仮説水路付け替え時の立会い調査で、包含層の東側の範囲は調査区東壁から５ｍ以内であることが確認された。土層の堆積状況は、崖面には崩落土や盛土による２次的な堆積が認められるが、全体に耕作等による撹乱も少なく安定した堆積状況が観察された。厚さは最大で1.8mを測る。堆積土は断面観察で21層に分けられたが、大半が黒褐色シルトを基調として土色、土質の違いが顕著ではなく精査中は明確な分層が困難であるため、表土から３層をⅠ層、４層およびY軸48以北の15層をⅡ層、６層から11層をⅡa層、12層以下をⅡb層として遺物を取り上げている。遺物は表土直下から最下層まで多量に出土した。各グリッドでは無遺物となる間層は存在せず、地山直上まで多量の遺物を包含する状況が確認された。層序ごとの時期差は明確ではなく、垂直面よりもむしろ水平面での分布状況に時期差が認められそうである。

敷石状の礫群

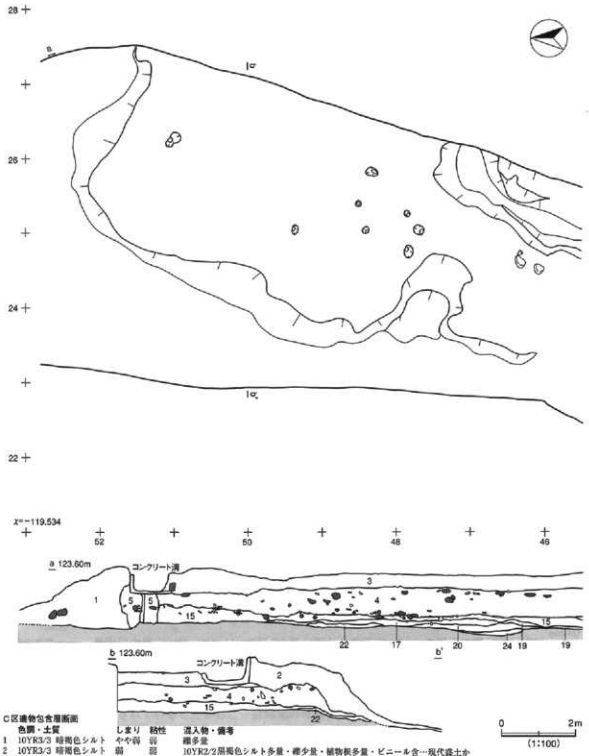
遺物包含層中、24・25－44・45区Ⅱb層上面から長径30～50㎝の扁平な礫が敷石状にまとまって検出された（第22図　写真図版45）。北側では礫同士が重なり、全体として南西に向かって緩く傾斜している。何らかの施設として機能していたとも考えられるが、堆積土全体に多量の礫が包含されていることから、一括廃棄の可能性が高い。

地山面の溝状の落込

本区域直下の地山面では、45基の小ピットとともにクランク状に東から西に向かって蛇行する浅い溝状の落ち込みが検出された（第22・23図　写真図版46）。東側の大半は調査区外となるが、幅２～３ｍとみられ、22・23－44・45区では水溜状に広くなっている。Y軸46以南では底面に直径５～20㎝大の礫が敷石状に観察された。また、22・23－43・44区付近では溝の西辺部分に人為的に敷かれた可能性のある小礫群が検出されている。本溝は完掘時も通水しており、所属時期は不明であるが、水場的な施設として機能していた可能性がある。



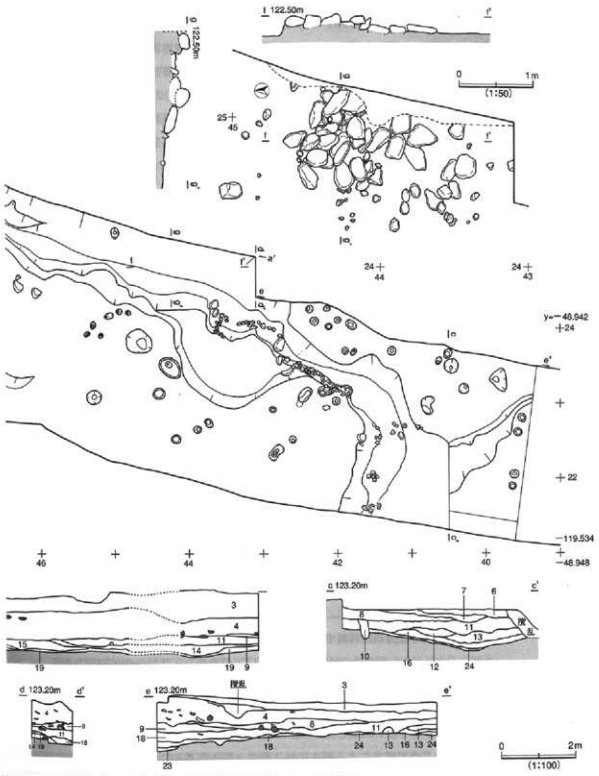
第20図　B区基本層序



C区遺物包含層断面

	色調・土質	しまり	粘性	混入物・備考
1	10YR3/3 暗褐色シルト	やや弱	弱	礫多量
2	10YR3/3 暗褐色シルト	弱	弱	10YR2/2黒褐色シルト多量・礫少量・植物根多量・ビニール含…現代盛土か
3	10YR3/2 黒褐色シルト	中	やや弱	10YR2/2黒褐色シルトブロック多量・礫少量・炭化物少量・酸化鉄少量・土器含…水田耕作土か
4	10YR2/2 黒褐色シルト	やや弱	中	礫少量・炭化物多量・酸化鉄少量・土器多量…人為堆積か
5	2.5Y3/1 黒褐色シルト	やや弱	中	礫少量・土器多量…現代瓦土か
6	10YR2/2 黒褐色シルト	中	中	礫多量・炭化物多量・土器少量…人為堆積
7	10YR3/3 暗褐色シルト	中	やや弱	黄褐色シルトブロック微量・礫微量・炭化物多量・砂少量・土器少量…水成堆積
8	10YR3/1 黒褐色シルト	中	中	礫多量・炭化物多量・酸化鉄微量・土器多量…人為堆積
9	10YR3/1 黒褐色シルト	中	中	礫少量・炭化物多量・土器多量…人為堆積(一部に水成堆積混在)
10	10YR3/2 黒褐色シルト	弱	やや弱	黄褐色シルトブロック多量・炭化物下部に多量・土器片出土…人為堆積
11	10YR2/2 黒褐色シルト	中	やや強	礫少量・炭化物少量…自然堆積か
12	10YR2/1 黒色砂質シルト			炭化物微量・酸化鉄微量…水成堆積

第21図　C区遺物包含層（1）



13	10YR4/4 褐色細砂シルト	やや強	弱	炭化物少量・酸化鉄少量…ブロック状の混入土か
14	10YR3/1 黒褐色シルト	やや弱	中	暗褐色シルト少量・炭化物微量…自然堆積
15	10YR2/2 黒褐色シルト	やや弱	強	にぶい黄褐色シルトブロック少量・礫微量・炭化物少量・下層部に砂微量・土器含…自然堆積か
16	10YR3/2 黒褐色シルト	やや強	中	炭化物少量・酸化鉄少量…自然堆積
17	10YR3/3 暗褐色シルト	弱	やや強	黒褐色シルト少量…自然堆積
18	10YR2/3 黒褐色シルト	弱	中	褐色シルトブロック少量・炭化物少量…人為堆積か
19	10YR4/4 褐色砂質シルト	弱	弱	礫少量・炭化物微量…地山か
20	10YR2/1 黒色シルト	やや弱	強	やや泥炭質・炭化物少量…水成堆積か
21	2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト	弱	中	酸化鉄少量…水成堆積か
22	10YR4/4 褐色シルト	弱	やや強	暗褐色シルトブロック少量・上層部に炭化物微量…地山
23	10YR4/4 褐色砂質シルト	弱	中	…地山
24	10YR4/3 にぶい黄褐色シルト	やや強	やや弱	黒褐色シルト微量・褐色シルト微量…地山

第22図　C区遺物包含層（2）

2　出土遺物

今回の調査では、縄文土器、土製品、石器、石製品など整理箱にして918箱の遺物が出土した。これらは非常に広範かつ豊富な内容をもつものであったが、報告書作成までの期間が限られたため、十分な分析および資料化を行うことができなかった。したがって本項では出土遺物についての大まかな傾向を提示するにとどめた。今後さらに検討を進める必要がある。

A　縄文土器

第Ⅰ群土器（第23～45図・第93図７）

A区出土の土器を本群とする。所属時期は縄文時代中期後葉から後期前葉で中期末葉を主体とする。A区の竪穴住居跡群、配石・列石遺構群の埋設土器を中心に出土し、C区南端部の落込み部分でも主体となっている。焼成は個体によるばらつきはあるが概ね良好で、胎土中には砂粒、骨針の混入が目立つ。器面の調整は、地文以外の施文要素を持つものに丹念な磨きが顕著である。器種には深鉢、鉢、浅鉢、壺、注口がある。

A類　無文地に沈線と磨消縄文による渦巻き文、C字文、楕円文を主たる文様構成要素とし、器面全体に文様展開されるもの。大木９式期に並行する。器種は深鉢のみである。ＳＴ２、ＥＵ194、195、198から出土している。器形がわかるものは以下のように細分される。

沈線十磨消縄文

a　いわゆるキャリパー形となるもの（第23図１・２）。

b　口縁部が外反するもの（第25図１）。

c　頸部でくびれて口縁部が内湾ぎみに外傾するもの（第43図２）。

B類　隆起線と幅広の無文帯による楕円文や、「C」字状、「S」字状またはその組み合わせや横方向への連続施文により文様構成されるもの。無文帯による区画内に竹管による刺突文を充填するものもみられる。無文帯と地文との境界は沈線によって明確に区画される。地文は単節、複節、反撚の斜縄文が無造作に縦、斜めに回転施文される。大木10式期の所産である。ＳＴ２、10、11、16、ＳＫ60から出土している。

隆起線と幅広の無文帯

1　深鉢

a　大型で胴が張る樽形の器形となるもの（第33図２・第38図１）。

b　小型で直線的に外傾するバケツ形の器形となるもの（第27図３・第28図２）。

c　キャリパー形となるもの（第27図７）。緩やかな４単位の波状口縁となる。

2　鉢　　小型で頸部が「く」字形に屈曲し口縁部が内傾するもの（第23図３）。

3　浅鉢　大型で胴が膨らみ頸部でくびれて口縁部が外反するもの（第29図４）。ＳＴ11から１点が出土した。口縁部は平縁で赤彩が施されている。

C類　沈線と磨消縄文による幅広の無文帯でB類と同様の文様構成がなされるもの。特に「S」字の横方向への連結による文様構成が目立つ。地文は単節、複節の斜縄文が無造作に縦、斜めに回転施文されるほか、撚糸文も多用される。器種は深鉢、壺がある。ＳＴ12、ＳＫ44、ＥＵ88から出土している。

沈線によるS字の連結文

1　深鉢

a　大型で胴張りの器形となるもの（第36図２）。

b　胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる円筒形の器形となるもの（第30図１）。

c　胴が膨らみ頸部でくびれて口縁部が外反するもの（第32図４・第39図２）。

d　小型で直線的に外傾するバケツ形の器形となるもの（第31図１）。

2　壺　小型で胴部下半が膨らみ胴部上半に向かって直線的に内傾する器形となるもの（第31図５）。ＳＴ12から１点が出土している。

D類　隆起線が口縁部および底部直上の文様帯区画として用いられ、胴部は地文のみが施文されるもの。区画の外側は無文帯となる。ＳＴ11、12、16、ＥＵ89、116、117から出土している。器種は深鉢、浅鉢がある。

隆起線による文様帯区画

1　深鉢

a　大型で胴張りの器形となり、樽形の器形となるもの（第35図３・第42図１）。

b　胴が膨らみ頸部でくびれて口縁部が外反するもの（第30図５）。

2　浅鉢　頸部付近で内側に屈曲し口唇直下から外反する器形となるもの（第29図３）。

E類　D類の隆起線が沈線に置換しているもの。ＳＴ12、16、ＳＫ44、ＥＵ94、232から出土している。器形がわかるものは、大型の胴張りで樽形の深鉢となる。

F類　縦に連結して垂下する「S」字状沈線文、沈線で区画された無文帯によって文様構成されるもの。後期前葉の所産である。ＥＵ95から深鉢が１点出土した（第41図１）。器形は胴膨らみで頸部から口縁部にかけて緩やかに外傾し、口縁は４単位の波状となる。

後期前葉

G類　器表面全体に沈線文が施文されるもの。沈線は撫曲状工具または棒状工具により連弧状あるいは縦方向に施される。ＳＴ12、32から出土している。器種は深鉢、浅鉢がある。

1　深鉢　口縁部が内湾するもの（第32図７）。

2　浅鉢　頸部が「く」字形に屈曲する器形となるもの（第31図４）が１点出土した。

H類　地文のみが施文されるもの。いずれも口縁部は平縁となる。器種は深鉢、鉢、浅鉢があり、すべての竪穴住居跡から出土している。

1　深鉢

a　大型で胴張りの器形となり、口縁部が外反するもの（第24図１）。

b　大型で胴が張る樽形の器形となるもの（第26図１・第27図１）。

c　大型の胴張りで胴部上半から口縁部が直上するもの（第28図４）

d　胴部上半に最大径をもち口縁部が短く直上するもの（第35図１）。

e　薄手で底部から内湾ぎみに外傾して口縁部に至る単純な器形となるもの（第41図２）。

施文、器形、調整等が後述する第Ⅱ群土器にきわめて近い。

2　鉢　　直線的に外傾するもの（第28図１）が１点出土した。

3　浅鉢　直線的に外傾するもの（第27図２）が１点出土した。

I類　無文となるものを一括する。器種は、深鉢、注口土器、ミニチュア土器がある。

1　深鉢　器形全体が把握できるものでは、胴部上半に最大径をもち、口縁部が内傾するもの（第23図４）がある。

2　注口土器　四角柱形のもの（第32図６）が１点出土した。

3　ミニチュア土器　台付鉢形（第32図５）、深鉢形（第33図４）、壺形（第93図７）が出土した。

第Ⅱ群土器（第51～94図）

B区、C区の遺物包含層を中心に出土した土器を本群とする。両遺物包含層間は直線距離で約90mの距離があるが、出土した土器の様相は数量的な差はあるもののほぼ同じで、その所属時期は縄文時代晩期初頭から晩期後葉が主体となる。

器種は、a.深鉢、b.鉢、c.浅鉢、d.台付鉢、e.皿、f.壺、g.注口土器、h.香炉形土器、i.多孔土器、j.ミニチュア土器がある。

A類 縄文時代後期末葉に比定されるもの。図化し得なかったがB・C両調査区より貼瘤を伴う入組文の深鉢の破片が若干出土している。また、第94図17のミニチュアの注口土器も本類に所属すると考えられる。

B類 縄文時代晩期初頭、大洞B1式に併行すると考えられるもの。C区遺物包含層北端の26・27－50～52区付近からややまとまって出土した。以下のように細分される。

入組文・三叉文　1 入組文、三叉文によって文様構成されるもの。器種はa.深鉢（第91図4・第92図6・7）、g.注口土器（第79図1）がある。

珊瑚状突起　2 珊瑚状突起を持つもの（第90図2）。

3 体部が無文となる壺形の注口土器（第91図1・第93図3）。

C類 縄文時代晩期前葉、大洞BC式に並行するものを主体とするが、一部晩期中葉前半の内容を含むと考えられる。本群土器の中では後述するD類とともに数量的にもっともまとまって出土した。

羊歯状文　1 羊歯状文により文様構成されるもの。a.深鉢（第75図1）、b.鉢（第48図3）、c.浅鉢（第86図6）、d.台付鉢（第49図2）、h.香炉形土器（第60図2）がある。いずれも体部は地文のみが施文される。

K字状・浮彫状入組文　2 K字文、浮彫り状の入組文により文様構成されるもの。c.浅鉢（第80図1）、e.皿（第86図3）、f.壺（第48図8）、g.注口土器（第46図5）がある。

3 1、2の組み合わせにより文様構成されるもの。b.鉢（第69図7）e.皿（第94図7）、g.注口土器（第86図1）がある。

D類 縄文時代晩期中葉前半を主体とするもの。大洞C1式に並行する内容をもつものと考えられる。

連続截痕　1 平行沈線間の連続截痕を主たる文様構成要素とするもの。a.深鉢（第48図6）、b.鉢（第64図9）、c.浅鉢（第46図9）、d.台付鉢（第92図4）、f.壺（第83図7）、g.注口土器（第46図8）がある。

大腿骨文　2 大腿骨文により文様構成されるもの（第50図6・第58図5）。c.浅鉢（第50図6）、d.台付鉢（第58図5）、f.壺（第74図1）がある。

クランク文　3 クランク文により文様構成されるもの。b.鉢（第76図5）、g.注口土器（第68図8）がある。

雲形文　4 雲形文により文様構成されるもの（第46図7・10）。c.浅鉢（第46図7）、d.台付鉢（第77図6）、e.皿（第46図10）、f.壺（第72図4）、g.注口土器（第49図1）がある。

5 沈線で区画された口縁部に「C」字状、「S」字状の沈線文を連続施文するもの（第46図11・第55図2）。すべてa.深鉢である。今回の調査でまとまった点数が出土した。第65図1は口唇部にC類1の特徴を有する。

6 無文地に平行沈線文、貼瘤状突起等で文様構成されるもの。d.台付鉢（第80図8）、f.壺（第47図5）がある。特に小型の壺に特徴的にみられる。

E類 縄文時代晩期中葉後半、大洞C2式に並行するもの。

1 体部上半の凹線内、口唇部に密な連続截痕を施文するもの。b.鉢（第52図8）、c.浅鉢（第72図12）がある。鉢はいずれも体部上半の文様帯区画沈線付近で「く」字形に内傾し、口縁部が短く外反する器形となる。　密な連続截痕

2 楕円形の渦巻文を基本とする平滑な雲形文により文様構成されるもの。c.浅鉢（第60図1）、g.注口土器（第66図2）。がある。浅鉢は丸底風の椀形の器形で体部内面に段または突帯を巡らすものが多い。　平滑な雲形文

F類 縄文時代晩期中葉後半から晩期後葉に比定されるもの。大洞C2式から大洞A式に並行するものである。C区遺物包含層の南半域21・22－39～42区から比較的まとまって出土している。

1 眼鏡状浮線文、頸部から口縁部の平行沈線文と波状縁または突起と組み合う口唇部の沈線文を主たる文様構成要素とするもの。a.深鉢（第57図4）、b.鉢（第59図6）、c.浅鉢（第56図2）、がある。　眼鏡状浮線文

2 内側に横線を配した三角連繋沈線文、眼鏡状浮線文により文様構成されるもの。c.浅鉢（第54図10）がある。

3 雲形文、眼鏡状浮線文により文様構成されるもの。c.浅鉢（第61図6）がある。

4 楕円文、縦位の平行沈線文で文様構成されるもの。b.鉢（第54図4）、c.浅鉢（第87図2）、f.壺（第87図6）、g.注口土器（第55図5）がある。2・3・4は大洞C2式に並行すると考えられる。　楕円文・縦位の平行沈線文

5 横方向と斜行する沈線の区画内に三角形の区画文、貼瘤状の突起等で文様構成されたもの。b.鉢（第64図6）がある。大洞A式に並行すると考えられる。

6 工字文を主たる文様構成要素とするもの。a.深鉢（第53図2）、c.浅鉢（第63図8）d.台付鉢（第52図2）、f.壺（第52図5）、g.注口土器（第55図5）がある。　工字文

G類 体部には地文のみが施され、体部上半から頸部で沈線により区画され口縁部は平行沈線文もしくは無文となるもの。C・D・E・F類に共伴するものと考えられる。a.深鉢（第46図6）、b.鉢（第52図1）、c.浅鉢（第52図6）、f.壺（第50図2）がある。

H類 地文のみが施されたものを一括する。a.深鉢（第46図4）、b.鉢（第49図5）、c.浅鉢（第69図2）、d.台付鉢（第70図3）、f.壺（第58図4）がある。

I類 器面全体に櫛描沈線文が施文されるもの。a.深鉢（第59図3）がある。

J類 無文地に横方向の沈線文が施されたもの。a.深鉢（第59図5）、c.浅鉢（第61図9）、e.皿（第57図9）、f.壺（第48図4）がある。

K類 無文のものを一括する。a.深鉢（第77図1）、b.鉢（第61図2）、c.浅鉢（第56図5）、e.皿（第88図8）、f.壺（第46図3）、g.注口土器（第47図6）、i.多孔土器（第93図4）、j.ミニチュア土器（第93図8）がある。

B　土製品

土偶（第95図・第96図　写真図版77・80）

土偶はA区から1点、B区から7点、C区から7点を図示した。このほかB・C区では土偶の破片とみられるもの数点が出土している。

A区　第95図1に図示した1点が出土した。板状土偶の体部破片と思われる。中央部に垂下して渦巻き状となる沈線が描かれる。表面は丹念に磨かれる。大木10式期の所産と考えられる。

B区（第95図2～8）7は頭部破片である。頭頂部および右耳を欠損するが顔面の表現の特徴から、大洞B1式期に所属するものと考えられる。2・5は所謂X字形土偶である。大洞C1式の所産とみられる。5は破片であったが、2はほぼ完形である。3は中空の土偶で頭部、両腕、右脚を欠損する。6は同じく中空土偶の頭部破片、8は下半身の破片である。いずれも大洞C2式期に比定される。4は四肢を欠損する小型の土偶である。顔面は省略され、胸部に首飾り状に連続刺突が施される。

C区（第96図）1は中空土偶の腹部破片、3は同じく上半身の破片である。この2点は大きさ、施文技法などがよく似ている。大洞C2式期の所産であろう。2は所謂蹲踞形土偶の腹部破片である。被熱のためか表面の傷みが目立つ。4・写真図版14・15は腕の破片、写真図版12は脚部の破片とみられる。

蹲踞形土偶

動物型土製品（第97図1・2）

C区から2点出土した。1は中空の破片で全体の形は不明である。図の下端部に穿孔がある。2は四足歩行の動物の上半身破片である。

土版（第97図3～12・第98図1）

B区から5点（3～6・8）、C区から6点（7・9～11・第98図1）が出土した。完形品はないが、いずれも直線的な「コ」字状あるいは「L」字状の集合沈線が両面に描かれる。また、第97図10、第98図1は穿孔されている。

耳栓（第98図2～22）

A区から2点（2・3）、B区から5点（4～8）、C区から14点（9～22）出土している。大半がきのこ形で貫通孔をもつが、貫通孔をもたないもの（18）、滑車形のもの（21・22）がある。赤く彩色された痕跡をとどめる。また、大型であるが24、31も縁辺部が滑車形となり、ピアスとなる可能性がある。

赤く彩色

円盤状土製品（第99図～第101図）

A区から83点（第99図）、B区から25点（第100図）、C区から69点（第101図）出土している。ほとんどが土器片の周囲を円形に加工したもので、貫通孔を中央に配するものもB区・C区に多い。また、当初から円盤状に作られた土製品（第100図25・第101図30～32）は大きさ、厚さともにまちまちであるが、いずれも縁辺部が滑車形に窪んでおり、ピアス等の装飾品の可能性もある。

その他の土製品（第98図23～33）

A区では短い筒形（23）と太いキセル形（25）の管状土製品、B区では十字型の土製品（26）、C区では土玉（27）、スプーン状土製品（32・33）、UFO形（28）等の土製品が出土している。

C　石器

今回の調査では約43,600点の石器が出土した。このうち、剥片素材の所謂toolが約7,000点、磨製石斧、打製石斧など礫核素材の石器約1,400点などのほかは、剥片石器生産にかかわる剥片、石核等である。器種は剥片素材の石器に、石鏃、尖頭器、石錐、石匙、石篦、異形石器、掻器、削器のほか剥片の縁辺部に簡単な2次調整あるいは使用の際の刃こぼれがみられるものがある。礫素材の打製石器として、打製石斧、偏平礫石器、円盤状礫石器がある。また、磨製石器では磨製石斧、石錘、凹石、磨石、敲石が出土している。なお、石器については現在整理途中であり、数量の正確な把握を含めた各器種の分析および検討については今後の作業となる。掲載できた資料も全体のごく一部に過ぎない。したがって以下では器種ごとの分類を中心にその概要を述べる。

石鏃（第102図1～37　写真図版82・83）

石鏃は480点が出土した。調査区ごとの内訳は、A区から49点、B区から184点、C区から247点となっている。石材は頁岩を主体として、鉄石英、玉髄、黒曜石、流紋岩が使用される。これらは、基部の形態により類別される。

1類　基部側に抉り込みのはいるもの。

a　丸みを帯びた深い抉り込みが入るもの（第102図4・9・10・12）

b　半円形となる浅い抉り込みが入るもの（第102図3・7・11　写真図版82－1～9・25・26・写真図版83－2）

c　基部に凹弧状の僅かな抉り込みが入るもの（写真図版83－1）。

2類　基部が丸みを帯びて突出する所謂円基鏃（写真図版82－21～23）。

3類　基部が直線状となる所謂平基鏃（第102図1）。

4類　基部に茎をもつ有茎鏃。

a　かえしが明瞭に発達するもの（第102図14・17）。

b　aに属するもののうち刃部にノッチがはいるものを抽出した（第102図23　写真図版82－60）。　刃部にノッチ

c　かえしがなだらかなもの（第102図20・36）。

5類　基部が大きく突出し平面形が凸レンズ状となるもの。刃部と基部との境界が不明瞭となる。

a　長幅比が小さく幅広の形態となるもの（第102図2）。

b　長幅比が大きく所謂柳葉形となるもの（第102図15・16・37）。

6類　基部が大きく突出し平面形が菱形となるもの（第102図21）。

尖頭器（第102図38　第103図19　写真図版82－20～24・61～63　83－36～41）

両面加工または片面加工によって尖った先端部を作出した石器を尖頭器とした。形態により以下のように細分される。

1類　背面側、主要剥離面側ともに素材の中央に達する加工で覆われ、一縁辺が凹弧状、もう一辺が凸弧状となるもの（写真図版82－20　83－36・37）。所謂「嘴形石器」である。　嘴形石器
大きさ、重量ともに一般的な石鏃と同程度であるが、左右非対称となるため先端部が凹

弧側に傾く。

2類　中央部付近に最大幅をもち、平面形が木葉形になる尖頭器。

a　左右対称形となるもの（第103図19　写真図版82－61～63　83－38・41）。

b　一縁辺が張出し、左右非対称となるもの（第102図38）。

c　基部が凸弧状を呈するもの（写真図版83－39・40）。

石錐（第102図39～44　第103図1～18）

素材となった剥片の縁辺に調整加工を施して、その一端あるいは相対する両端に尖った先端部を作出した石器を石錐とした。全部で609点出土した。調査区ごとの内訳は、A区から59点、B区から134点、C区から416点となっている。石材は頁岩を主体とするが、B区、C区から出土した3類aのなかに玉髄製の小型の石錐が多量に含まれる。これらは形態の特徴から以下のように分類できる。

多量の玉髄製石錐

1類　長い尖頭部をもつもの。尖頭部の加工が顕著であり、基部との間にノッチがはいるため部位の区別は明瞭である。

a　平面形が左右対称となるもの（第102図40・41～44　第103図9・12・13・16・17）。

b　基部の片側が張出して左右非対称となるもの（第103図3・18）。

2類　細長い棒状の形態となるもの（第103図4・5・8・11・15・17）。

3類　素材となる剥片の形を大きく変えることなく、短い尖頭部を作出したもの。素材の形に制約されるため、多様な形態をとる。以下のように細分される。

a　一端に刃部をもつもの（第102図39　第103図1・2・6・14）。

b　複数の刃部をもつもの（第103図10）。

石匙（第103図20～27　第104～105図）

相対する二つのノッチを入れることによって作出されたつまみをもつ石器を石匙とした。全部で393点出土した。調査区ごとの内訳は、A区から55点、B区から96点、C区から242点となっている。ほとんどが頁岩製で、鉄石英、玉髄質のものを若干含む。

1類　つまみを上方に置いたとき側縁が刃部となる縦形のもの。

a　左右が対称形となるもの（第103図25・27　第104図1・10・11・13　第105図5・10）。

b　左右が非対称となるもの（第103図20～23・26　第104図4・5・7・9）。

2類　つまみを上方に置いたときその下端が刃部となる横形のもの（第104図8・12・14　第105図2～4・6・8・9・11）。

3類　1・2類の中間的な形態となるもの（第104図2・3・6・15　第105図1）。

石箆（第106図　第107図　写真図版87　88－1～11）

素材となった剥片の背面と主要剥離面の両面に加工され、その長軸の末端が刃部になると考えられる一群。また、背面だけの加工であっても、刃部と考えられる末端の刃角が小さく、掻器とはなりえないもの。この定義に当てはまる石器は、全部で127点出土した。調査区ごとの内訳は、A区から19点、B区から37点、C区から71点となっている。すべて頁岩製である。

これらは平面形により以下のように分類できる。

1類　撥形の形態となるもの。

a　両面のほぼ全域にわたって加工が施されるもの（第106図1・10・12・14・15　第107図2・3・6・7・11・12）。

b　縁辺部を中心に加工が施され、素材面を大きく残すもの（第106図5～8　第107図1・5・8・9）。

2類　短冊形の形態となるもの。

a　両面のほぼ全域にわたって加工が施されるもの（第106図3・11・13）。

b　縁辺部を中心に加工が施され、素材面を大きく残すもの（第106図2・4・9　第107図10）。素材面を残すのは主要剥離面側に顕著である。

3類　撥形にも短冊形にもならないもの（第107図4）。背面側を中心に主要剥離面側の中央付近を除いてほぼ全域にわたり加工が施される。刃部は凸弧状で平面形態は楕円形に近いものとなる。

掻器・削器・加工痕ある剥片

急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を掻器、剥片の縁辺に連続的な調整加工を施して刃部を作出した石器を削器、剥片に二次加工を施しながらも、刃部を作成するような連続した加工とはなっていない石器を加工痕ある剥片とする。これらについては整理が不十分なため個別の分類はできないが、A区から約650点、B区から約1,450点、C区から約3,000点の全部で約5,100点が出土した。

異形石器（第109図1～4）

素材の両面全体に精緻な調整加工を施し、実用的な定形石器の定義にあてはまらない形態を作出した石器を異形石器とする。今回の調査では図示した4点が出土した。石材は頁岩および鉄石英を使用しているが、非常につやのある良質な素材を選択している。

石核

剥片石器の製作において、母岩からの剥片剥離工程の最終段階で放棄された残核である。全部で824点が出土した。内訳はA区から125点、B区から172点、C区から527点となっている。個体の大きさや作業面の状況から多様なバリエーションの存在が予想されるが、多くは多方向からの剥離面から構成されており、頻繁に打面転移を繰り返す剥片剥離技術を基本とすることが伺われる。資料の絶対数が非常に多く、また、剥片の出土点数が全体で34,777点にのぼることからも各調査区において盛んに石器製作が行われていたものと考えられる。石材は頁岩を主体とするが、黒曜石、鉄石英、玉髄等も出土しており、今回の調査で出土したtoolとほぼ合致するものであった。なお直下の塩根川河川敷では、量的には多くはないものの頁岩の原石の採集が可能であった。

頻繁な打面転移

盛んな石器生産

打製石斧（第108図　写真図版88－12～20　写真図版89）

偏平で強度の高い礫を素材として加工を施し、その長軸の一端に刃部を作出した石器を打製石斧とした。素材には凝灰岩質、安山岩質の石材が多用される。

1類　平面形が撥形を呈し、整形のための剥離が縁辺部のほぼ全周にわたって施されたもの（第108図1・2　写真図版89－12・14・15）。

2類　平面形が短冊形を呈し、整形のための剥離が縁辺部のほぼ全周にわたって施されたもの（写真図版88－13　89－4）。

3類　剥片を素材として製作されているが、調整加工が粗く、不定形となるもの（写真図版89－6～・11・13・17）。

4類　刃部となる長軸の一端に粗い剥離を施し、縁辺部は未加工または礫らで粗い剥離が施されるもの（写真図版88－17・89－1・2・16）。素材の形を大きく変えることはない。

5類　縁辺部を敲打により整形するもの（写真図版88－12・19）。

扁平礫石器（第108図　写真図版88－12～20　写真図版89）

偏平な楕円形の礫を素材として、その片側縁または両側縁に粗い調整加工を施して刃部としたものを偏平礫石器とした。刃部は両面加工となる。石材は凝灰岩質、安山岩質のものが用いられる。加工部位により以下のように分類される。

1類　両側縁に刃部をもつもの（写真図版89－20）。

2類　片側縁に刃部をもつもの（写真図版88－18）。

3類　比較的小型の礫の末端部に刃部をもつもの（写真図版89－5）。

石鑿（第109図5～21　写真図版93－11～27）

粘板岩、蛇紋岩を素材として、丹念な研磨により製作されたもの。形態は磨製石斧を小型化したもので、末端には鋭利な刃部が作出される。A区から4点、B区から1点、C区から13点の合計18点が出土した。大きさにより以下のように分類される。

1類　重量が10g以下で幅が20mm以下の小型のもの（第109図5～7・15・16・18）。

2類　重量が10g、幅が20mmを超えるのもの（第109図8～11・13・14・17・19～21）。

3類　平面的な大きさは2類と同じであるが非常に薄手となり、重量が10g以下となるもの（第109図12　写真図版93－19）。

磨製石斧（第110図～第113図　写真図版90～93－1～10）

磨製石斧はA区から40点、B区から39点、C区から77点の合計156点出土した。このうち完形またはそれに近いものは、全体で7点と少なく、破損の比率が非常に高い。破損のしかたは、基部付近の破片も見受けられるが、中央から刃部に近いところで折れたものが多い。破損したものは敲石に転用されたもの（第110図7　第111図2　第112図1・2・10・12・16・第113図6・8・15）が目立つ。石材は緑泥片岩、安山岩質のものが多い。製作技法の側面から以下のように分類される。

破損品の敲石転用

1類　両側縁を面取りする所謂定角式磨製石斧（第110図1～12・14・15・17・19・20　第111図3・5～21　第112図1～8・10・11・13～17　第113図1～7・9・10・12・13・16・17）。

2類　横断面形が楕円形となる乳棒状石斧である（第110図13・16・18　第111図2・4　第112図12　第113図8・11・14・15）。1類に比較して、全長が同じであれば身が厚く重量が重くなる傾向がある。これらは研磨の工程が簡略化されて、表面に敲打痕、剥離痕を明瞭に残す。

3類　1類と2類の中間的な形態をもつもの（第112図9）。身の厚さは1類に近いが、側縁の面取りが不明瞭でこの部分を中心に敲打痕が残る。

4類　所謂環状石斧（第111図22）。破片が1点出土した。

円盤状礫石器（第114図　第115図　写真図版94　95）

偏平な礫を素材として、その縁辺部全周にわたり急角度の調整加工を施し、刃部を作出した石器である。凝灰岩質、安山岩質、粘板岩などの石材が用いられる。A区から19点、B区から17点、C区から36点の合計72点が出土した。これらは縁辺部の調整の状況により以下のように分類できる。

1類　縁辺部が全周にわたって片面加工されたもの（第114図4・5・13～16・18・20・21・28　第115図1・3・8・12・22・24）。断面形が台形となる。

2類　縁辺部が全周にわたって両面加工されたもの（第114図3・6・8・10～12・17・19・22～27・29　第115図2・4～7・9～11・13～16・18）。

3類　加工が礫らで縁辺の全周におよばないもの（第114図7　第115図19）。

4類　加工範囲が広く、両面または片面に素材面をほとんど残さないもの（第114図2　第115図20・21・23）。

5類　加工された縁辺部が敲打または研磨により刃潰しされているもの（第114図1・9・30　第115図17

石錘（第116図　第117図　写真図版96　97－1～8）

偏平な楕円形を呈する礫の長軸の両端に幅1～3mm、深さ2mmほどの刻みを磨ぎ出すことによって製作された石器を石錘とした。この定義に合致するものはA区で85点、B区で1点、C区で11点の合計97点出土した。刻みは長軸両端のほか、それと直行する側縁の最大幅付近にも刻みが付加されるものがある（第116図6　第117図1・9・23）。また、表面に使用に際してついたと思われる擦痕を有するものが多いが、第116図22では両端の刻みの間に装着時にできた紐の擦痕が明瞭に観察された。石材は粘板岩および凝灰岩質のものが多用される。これらは重量により以下のように分類される。

紐の擦痕

1類　重量が100g以上の大型のもの（第116図4・14　第117図11・12・15・26）。

2類　重量が50g以上100g未満の中型のもの（第116図3・7・8・10・15・21・31　第117図16・25・27～29）。

3類　重量が30g以上50g未満の小型のもの（第116図1・5・6・9・11～13・18・25・28・36・37　第117図1～6・8・9・13・14・17～24・30～33・35）。

4類　重量が30g未満のごく小型のもの（第116図2・16・17・19・20・22・24・26・27・29・30・32～35・38～42　第117図7・10・34）。

なお石錘の所属時期は、その大半がA区とC区南端の落込みから出土していることから、縄文時代中期後葉から後期前半と考えられる。

浮子（第117図36　写真図版97－9・10）

浮子は2点出土している。第117図36は、平面形が三角形状を呈し、中央の底辺寄りに直径1cmほどの穿孔がなされている。また、写真図版97－9はより小型で円錐形状に整形される。いずれも軽石製である。

軽石製

有溝砥石（第117図37）

有溝砥石は1点が出土した。偏平に整形された柔らかめの凝灰岩の一面に一条の直線的な溝部を有する。溝の断面は緩いV字状となる。

凹石（第118図～第124図　写真図版97～99）

川原石の表面に敲打によると考えられる凹痕をもつもので、そのほとんどが磨痕を併せ持つ。全部で332点の出土があり、その内訳はA区で192点、B区で29点、C区で111点となっている。なお敲打による凹痕のあるものは、礫面に磨痕があっても凹石として扱った。石材は安山岩質のものが多用される。これらは、凹痕の位置により以下のように分類できる。

1類　一面に凹痕をもつもの（第118図4　第119図2　第120図4　第121図1　第123図3・5　第124図6）。

2類　二面に凹痕をもつもの（第118図1～3・5～9　第119図1・3～8　第120図1～3・5～8　第121図2～10　第122図1～10　第123図1・2・4・7・8　第124図1～5）。今回出土した凹石の中で最も多い類型である。

3類　三面に凹痕をもつもの（第123図6）。

磨石（第124図　125図　写真図版98・99）

川原石が石皿などと組み合わされて使用された結果、礫面に磨痕を持つに至った石器である。石材は凹石と同じく安山岩質のものが多用される。これらは磨面の特徴から以下のように分類できる。

1類　平面形が楕円形または円形、断面が厚みのある楕円形で、礫面の全体を磨面として使用した可能性のあるもの（第124図7・10　第125図1・6・7）。特に表裏面を磨面として主体的に使用している。今回出土した磨石の中では量的に最も多い。第125図6・7は表面全体に赤色顔料の付着が観察された。

2類　平面形が楕円形の比較的偏平な礫の両側縁を磨面として使用するもの（第125図9）。表裏面および末端部には敲打による整形痕が認められる。

整形された磨石

3類　短い円筒状に整形されたもの（第125図3）。両端および側面全体が磨面として使用された可能性がある。

4類　平面形が円形または楕円形の偏平な礫の側縁部を磨面として使用したもの（第125図2）。磨面は明瞭で、側縁のほぼ全域に稜が形成されるような使い方がなされている。

5類　棒状の礫の主に末端部を磨面として使用したもの（第125図5）。

6類　比較的小型の錐頭形を呈する礫の一面を磨面として使用しているもの（第125図10）。

敲石（第124図8・9　第125図4・8　写真図版98・99）

敲石は棒状あるいは楕円形の礫の端部に敲打痕をもつ石器である。磨製石斧から転用されたものを除いた磨石、敲石は合計で712点が出土した。内訳はA区303点、B区132点、C区277点である。いずれも器面の敲打痕が顕著である。第124、125図に掲載した敲石は磨製石斧未成品から転用された可能性がある

石皿（第126図～第128図　写真図版100）

偏平で大形の川原石の一面あるいは二面に磨面をもつ石器である。石材は安山岩質と凝灰岩質のものがある。調査区内からは、偏平な大形の礫で中央部になだらかなくぼみのあるものが多量に出土しているが、使用による結果かどうかの判断がつけ難いものがほとんどである。図示したものは、いずれも中央部に明瞭な磨面をもつものである。周囲を意識的に加工したものはなく、礫の元々の形態をそのまま利用している。縁の立つもの（第126図3）も使用の結果の可能性が強い。

自然礫をそのまま使用

D　石製品

石棒（第129図～第133図　写真図版101～103）

石棒はA区を中心にまとまって出土している。表面を丹念に敲打して整形しているものが大半である。完形で出土したものは少ない。出土状況として注目されるのは、ST11床面直上（第129図1）、ST16EP18内に直立の状態で出土したもの（第129図2）、SM234の配石の一部としてその東端部分から出土したもの（第131図1）などがある。これらは縄文時代中期後半から後期前葉に所属すると考えられる。また、B区では小型の珪化木製のもの（第135図1）と大形の石棒の基部と思われる破片（第111図1）が出土している。第133図1は、以前に遺跡内から出土したものを地元の栗田与四郎氏から寄贈されたものである。

珪化木製の石棒

石剣（第134図～第137図　写真図版105～108）

石剣はB区・C区から多量に出土した。A区からは第134図1～4に示した4点が出土したのみである。この中で第134図1は凝灰岩質の石材を使用して製作されたもので系統的に他の石剣とは異質なものである。その他はA区出土のものも含めて縄文時代後期末葉から晩期に所属するものと考えられる。表面は丁寧に研磨されるが一部に敲打痕を残すもの（第135図8 第137図8）もある。すべて破損した状態で出土した。石材は粘板岩が用いられる。

すべてが破損品

岩版（第138図1～4　写真図版107）

岩版はC区から図示した4点が出土した。凝灰岩の整状の礫を素材として渦巻き状の文様を掘り込んでいる。

玉類・有孔石製品（第138図5～19　写真図版104・105）

図示した16点が出土した。各調査区から出土しており、形態も多様である。第138図7・13は翡翠製である。

盤状石製品（第138図20～30・34　写真図版104・105）

凝灰岩、粘板岩等の石材を使用して薄い盤状に研磨されたものである。平面形および大きさは石盤に類似する。第138図28は軽石製である。

楔状石製品（第138図31～33　写真図版105）

C区から3点が出土している。非常に小さい石製品であるが、表面は丹念に研磨される。使用される石材は石盤に類似する。

独鈷石（第139図1～4　写真図版104・106）

独鈷石は図示した4点が出土した。このうち1～3がB区、4がC区から出土した。

分銅形石製品（第139図5～7　写真図版104・105）

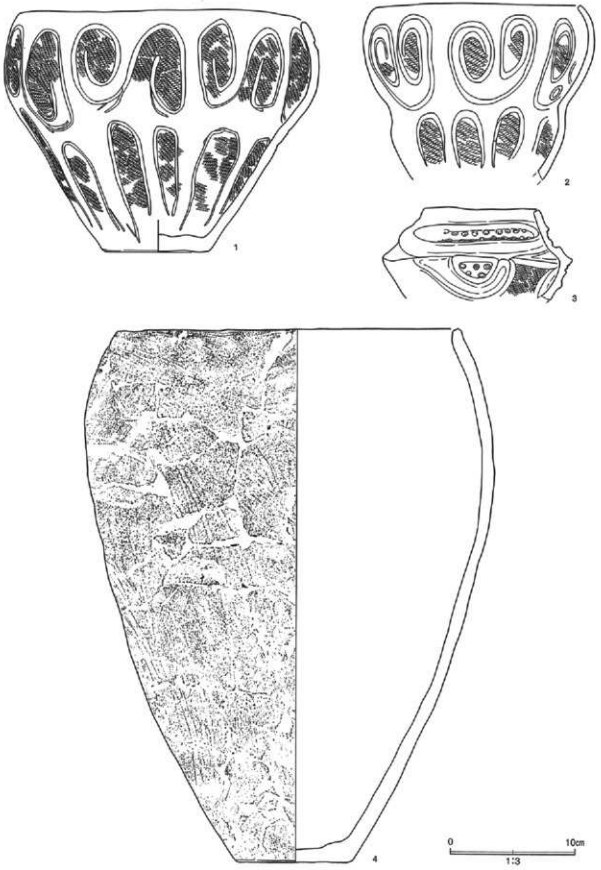
偏平な小形の楕円礫の側縁にノッチ状の加工が施される。

石冠（第140図1・4・5　写真図版106）

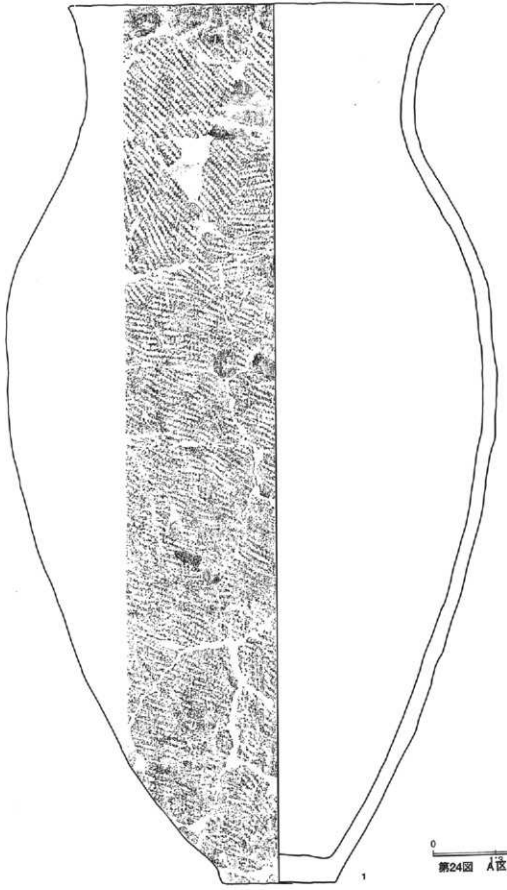
A区からスタンプ状の石冠が1点（1）、C区から断面が三角形を呈する石冠が2点（4・5）出土した。

線刻礫（第140図2・3・6・7　写真図版104～106）

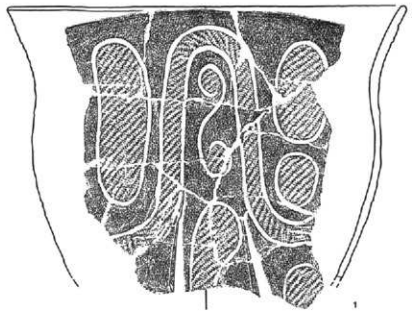
B区から1点（2）、C区から3点（3・6・7）が出土した。大きさ、形態、加工の状況など多様である。

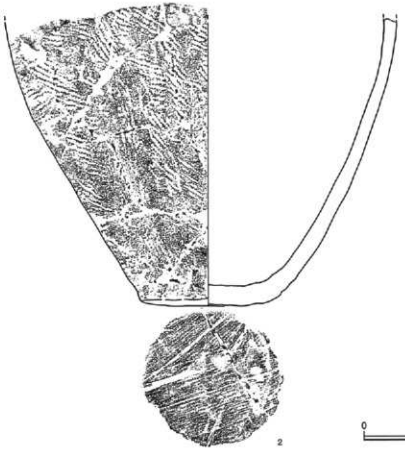


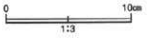
第23図　A区縄文土器（1）



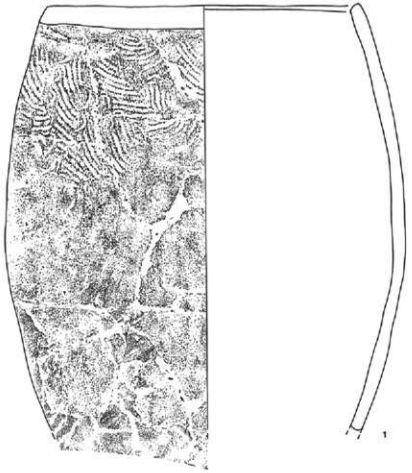
第24図　A区縄文土器（2）

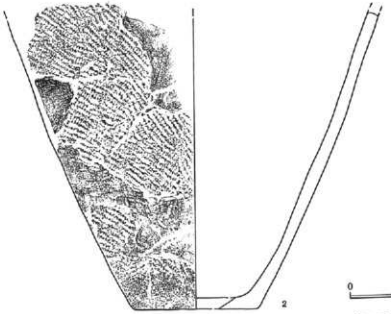




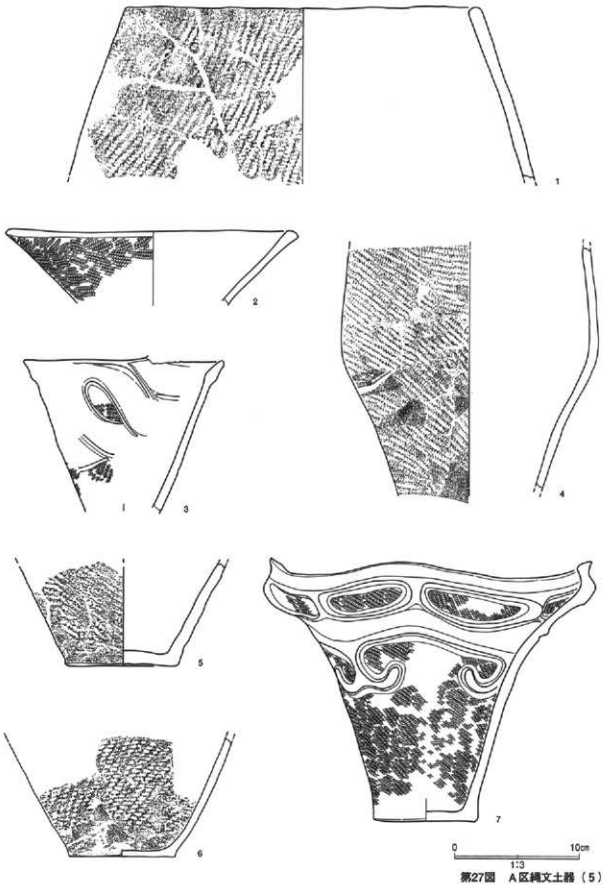


第25図　A区縄文土器（3）

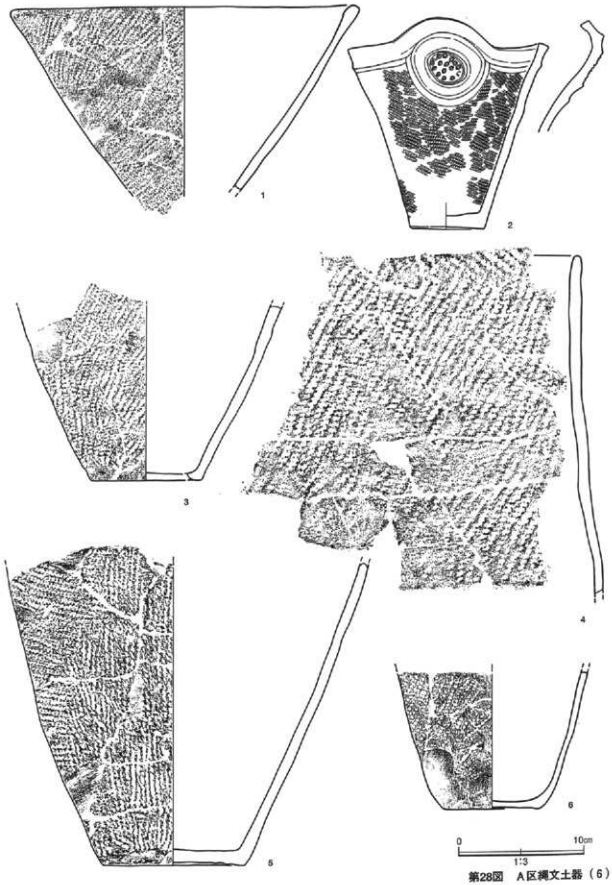




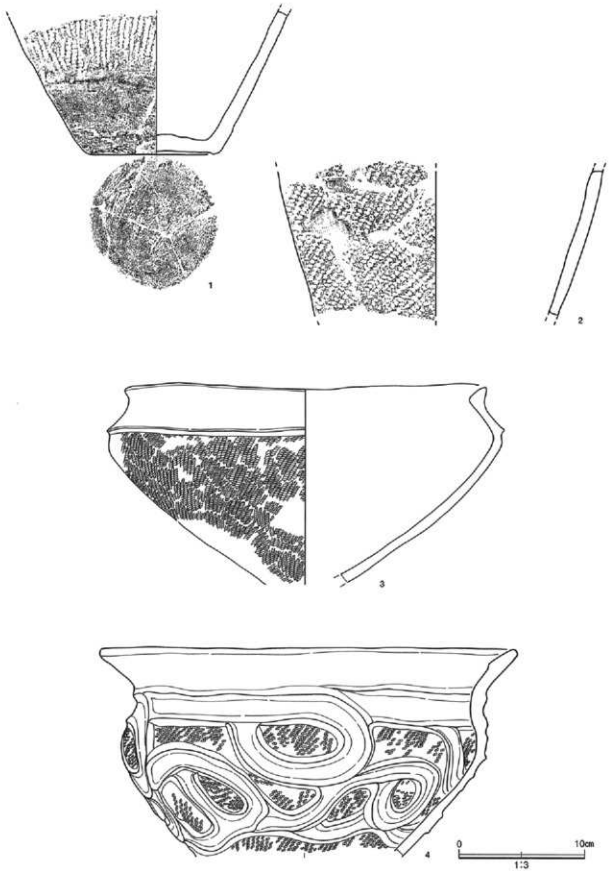
第26図　A区縄文土器（4）



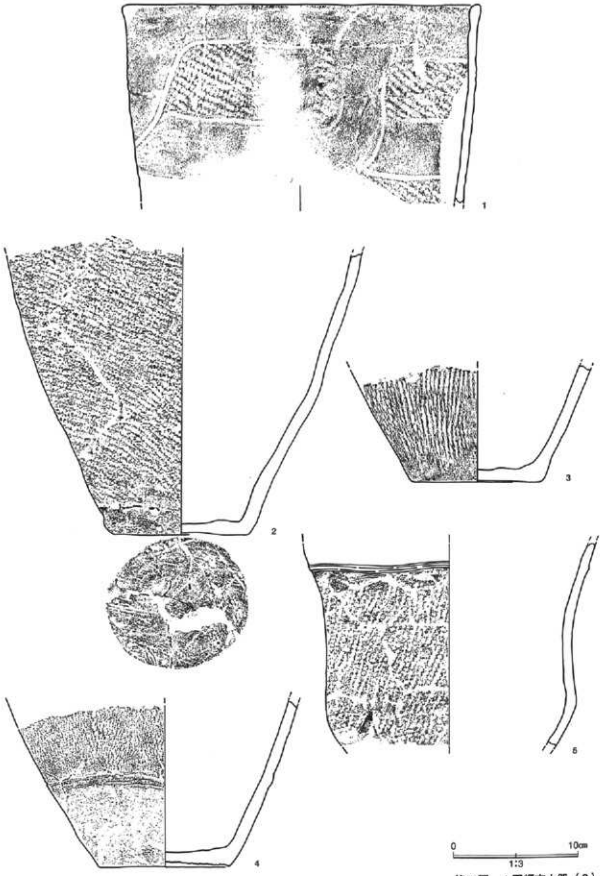
第27図　A区縄文土器（5）



第28図　A区縄文土器（6）



第29図　A区縄文土器（7）



第30図　A区縄文土器（8）